

万象

B A N S Y O

六月号

2022. 6



六月の句

六月を奇麗な風の吹くことよ

正岡子規

このシンプルさ、口にすればすつと体に入りこむ。
田園、草木、みな濃い緑に包まれる六月。「きれいな風」とは澄んで清らかな風、湿りけを含みつつも生気に満ちて吹き渡る。その肌触り、音、色と光、匂いをも五感で受けとめ、享受する。

「六月を」の「を」が効果的。ふくらみをもち、以下へ躍動する生命感を与える。

明治28年、子規は日清戦争従軍中に病を得て帰国、須磨で療養中の作というが、自然の息吹に子規はおのずと、身の恢復を信じたに違いない。

令和四年

六月号

万象

BANSYO

紫陽花の八重咲くごとく八つ代にを

いませ我が背子見つつ偲はむ

「万葉集 第二十卷」橘 諸兄

万 象

令和4年6月号

名誉主宰作品 山ざくら 内海 良太 4

主宰作品 若 緑 江見 悦子 5

風音集Ⅰ・Ⅱ

小林 愛子・中村 千久・山田 春生
福島せいぎ・柳澤 宗正・曾根 満
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

万象の窓③ 「与謝野晶子『白桜忌』に寄せて」 江見 悦子 10

同人作品

内海良太選 11

万象基金のご報告 31

同人会だより 同人会 31

同人作品の佳句 内海 良太 32

第四回中山純子記念俳句賞 発表 34

正 賞 牛 角 力 豊田 高子 35

佳 作 お四国の路 村上 和義 36

特別賞 よろずよ橋 高橋 ひろ 36

選 評 37

応募者一覧 41

同人特別作品

約 東	沼の春	前田貴美子	42
		岩崎 武士	43

特別作品評（四月号）

風のしをり③ 感動 沢木欣一

古典と遊ぼう② 『梁塵秘抄』と遊女

同人作品評（四月号）

万象ノオト「弁当箱」

巻頭作家（五月号）プロフィール

万象作品

江見悦子選

万象作品の佳句	江見悦子	66
俳句カレンダー掲載句自註 実梅干すひとつ筵に子を寝かせ	佐藤 哲	68
珈琲ぶれいく ⁽²⁵⁾		68
北から南から 長崎地域の紹介（長崎）	丸本 祥夫	69
東西南北		70

山ざくら

内海良太

(名譽主宰)

貝寄風の浜に軽石打ち上がる
ほの温し枝垂桜の輪に入れば
木歩碑の桜吹雪よもつと降れ
山ざくら咲き出し山を膨らます
昼からの日差しに応ふ山ざくら
机提げ利根川図志の堤焼く
甘茶寺幼き仏陀バスで着く

若 緑

江見悦子

(主宰)

晶子歌碑やはずゑんどう盛る野に
枝擦つてこぼるる白さ紫木蓮
城山の裾一面の花菜の香
オムライス運ぶロボット桜時
雨残る空明るめり花櫓
若緑山門小さき尼の寺
母^は許^{がり}へ春らんまんを逝き給ふ
佐藤晴子さんを悼んで

朝
桜

小林 愛子

(名譽顧問)

蜂蜜を瓶より瓶へ春の昼
黄身盛り上がる啓蟄の目玉焼
開墾のをとこ張り付く花の山
クレソンの叢がりに来て水の声
桜守水辺へ降りて行つたきり
ごはんつぶ甘きまで嘸み朝桜

又兵衛桜 中村 千久

(編集人)

吊橋をわたる遍路の杖の鈴
発掘のシャベルに乾く春の泥
その軽さその明るさや春落葉
花あせび夢みるやうに咲きにけり
又兵衛と呼ばれて桜ふぶきたる
腕抜きてよりマネキンの更衣

春の夢 山田 春生

(顧問)

白梅や拭き清めたる屋敷神
長生きをして蜺汁おかはりす
野に遊び一少年にもどりけり
竜宮でもてなされたる春の夢
花を見に卒寿の爺も加はれり
杖ついてめぐる小雨の花の寺

風音集 I

浜 節 句

福島せいぎ
(顧問)

きさらぎの上流の水ひかりあふ
負け鶏となりて吹かるる浜の風
旅人に酒をふるまふ浜節句
壺焼のうんこの好きな母ありき
声変りせし子の返事卒業す
教へ子の傘寿と言へり桜餅

初 蛙

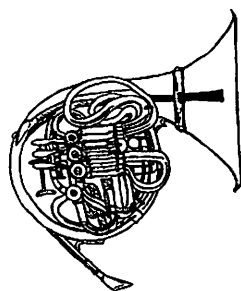
柳澤宗正
(顧問)

初蝶や畑に腰折る婆独り
花人へ羽を広ぐる孔雀かな
ゴンドラの見下ろす河口花筏
のどけしや日向のとかげ大あくび
田に水の引かるる頃や初蛙
若葉風入江を渡る婚の鐘

夏 蝶

曾根満
(同人会会長)

早苗田の早苗の色の水照かな
梅花藻へ伏流水の細波す
時鳥鳴くや雨乞ありし沼
杉の枝に森青蛙卵産む
外流し今朝は雀と磯鶉と
雨しとど夏蝶白く打たれたる



うたた寝

松原智津子

(北海道)

昼灯す古書店の奥鳥曇り
引き近き白鳥くぐもり声交し
あふれさうな状差し整理弥生尽
春昼やうたた寝の夢まだ少女
なで肩に春のショールはモスグリーン

樟若葉

亀田やす子

(栃木)

千切れ雲呑龍さまの御開帳
童子仏のつむりつるつる樟若葉
義貞の旗揚げの宮夏きざす
たかななの穂先地を割る縁切寺
新樹光浄土庭園復元す

蠅虎

沢辺たけし

(千葉)

鳥海山へつづく汀や春霞
引く白鳥しなやかに頸さしのばす
矢竹さし編笠百合を括りたる
太宰忌や没日見送る高架駅
蠅虎廊下の奥を見つめゐる

春竹の子

吉中愛子

(東京)

春キャベツ芯まで水のにほひかな
睡蓮の芽や水甕の肩寄せて
一人入りどつと跳び込むげん田
草も葉も混じる土筆の届きけり
今掘りし春竹の子の滑らかさ

初

花

榎本文代

(神奈川)

雀二十羽なんぢやもんぢやの芽吹きかな

音たてて麒麟の食める花ミモザ

春愁や針を通らぬ絹の糸

子の名刺夫に供へて三月尽

長男転勤

初花に雨のひと日となりにつけり

花 辛 夷

神田美穂子

(静岡)

放ち鶏路のたうには目もくれず

海までを一筆書や雪解川

荒鋤田畦を隔ててげんげん田

恋猫の赤き首輪と金の鈴

百段の磴の半ばや花辛夷

今朝の夏

井村和子

(石川)

みづくきの跡慕はしき白桃忌

師と在りし旅の日恋ふる今朝の夏

耳飾り落しし辺り龍の髯

宵つぱりに月下美人の香やいよよ

県庁の高窓巢立つ長元坊

南風原

前田貴美子

(沖縄)

うりずんの湿り紡げり絋里

糸張場水吸ふ蝶の影降り

花虻の真昼や里の機休め

暮れかぬる機工房の槌の音

風の名の里の夕影花樽

与謝野晶子「白桜忌」に寄せて

江 見 悦 子

5月29日は白桜忌、歌人与謝野晶子の忌日です。晶子が昭和17年に64歳で亡くなるまで十数年を暮らした場所が、現在は与謝野公園となつて、ここ杉並区荻窪に残っています。建物はありませんが、昭和2年この地に初めて家を立て、歌会を開き、様々なジャンルの書物を刊行し、全集を発売する等、精力的に筆を揮いました。また夫の鉄幹と共に全国へ旅を重ねながら、鉄幹の死後も、『新新訳源氏物語』を完成させるという業を成し遂げた地です。

晶子と言えば、恋愛賛美の情熱的な歌集『みだれ髪』と、歌の師であつた鉄幹との恋愛が先ず話題になります。男女が並んで歩けなかつた明治の時代に、恋愛のよろこびを大胆に歌い上げたこの歌集は、不倫問題も加わつて、世間に毀誉褒貶が飛び交いました。

その子二十櫛に流るる黒髪のおごりの春の美くしきかな（ママ）
春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手になぐらせぬ

後年、斎藤茂吉は「早熟の少女が早口にもいふ如き歌風であるけれども、これが晶子の歌が天下を風靡するに至るその第一歩として讃否のこゑ喧しく、新詩社のものも新詩社以外のものも、歌人も非歌人も、この歌集の出現に眼をみはつたのである」と適切な評価を下しています。

晶子は生涯に23冊の歌集を出し、その初期には蕪村の影響を色濃く受けたと言われています。『与謝蕪村』と題する原稿の中で、自身こう書いています。

私の俳句を鑑賞する心の目は、初め正岡子規先生に開けて頂いた。子規先生は蕪村を揚げて芭蕉を抑へられたので、私も一時蕪村を愛読し、蕪村に因つて人生自然の感じ方を啓発せられた所が多い。また詩語として国語を運用する技巧に就いても蕪村から若干の学ぶ所があつた。子規が『俳人蕪村』を新聞「日本」に連載したのは明治30年、晶子が19歳の時でした。

思い立って荻窪の与謝野公園を訪ねたのは、東京で開花宣言が出された翌日のこと、いくつもの歌碑の傍らに、晶子のふるさと堺市から寄贈された白桜が、可憐な薄紅色の花をつけていました。ともあれ、もう少し稿を進めたいと思っています。次回、七月号に続きます。

同人作品



内海良太選

○は佳句に選ばれました。

弟弟逝く二句
豪雪の洪滞弟を行く葬送車
敬子

○どこからも水の音する雪解かな
生きものにあまねく春のひかりかな
車窓より見えますと友鍊群来

札幌 落合 裕子

里山を越えて来る来る春吹雪
雪割や向う三軒ひびく音

○ひそやかに雪解促す夜の雨
春愁友の命日と同じ日なればと背中合せの誕生日
白銀の下なる墓や彼岸入り

札幌 濱谷 和代

木の根開く原生林のどの木にも
コロッセオミモザ枝垂るる石畳
早植ゑの種袋選る道の駅
潮風の向きまちまちや春岬
流水の音たてて解け海へ消ゆ

札幌 大内 和憲

雪底の物の形を透かし見る

春雨に走れば騒ぐ往診靴
首すぢの心地よき日や雪解風
豊満な乳房をゆらし雪割れり
雪解川渡りて影もふるへをり

札幌 紅 露 恵 子

春めくは雪の底なる水の音
残る雪木立の影のうすうすと
立ち上がる古草に添ふみどりかな
ぐんぐんとサイロの高さ雪解畑
春の雪中也の詩のリフレイン

札幌 大内 マ キ 子

○鉄棒の思はぬ低さ卒業歌
つなぐ手を母は離さず春の雪
雪吊を解いて緩むや空の紺
残月の空引き裂いて鳥交る
森に入り雪解雫の音ひろふ

札幌 中 鉢 弘 一

流水の沖に消え失す四温かな
筋なせる白濁の波鍊群来
寄生木に生命を分けて春待つ木

ポプラ樹の瘤にも柔き芽の出でて
声先に来て枝ゆらす春の鳥

札幌 北 浦 詩 子

山の端にまろみの戻る春一日
深き夜に雪解の音のとめどなく
金縁の薄るるカップ春浅し
頬撫づる風の柔らか春の夜
いち早く雪間に遊ぶ雀かな

江別 佐 藤 哲 子

やぶかげにそつとありしよ小春空
熊笹を道しるべとす大雪野
箕降る爺指す彼方ロシヤの灯
煮魚の匂ふ路地なり雪ばんば
雪解けて村は出てゆく道ばかり

苫小牧 林 陽 子

○受験子に濃厚接触者といふ重荷
落ちさうで何と頑固な雪庇
祝ひ膳跳ね出しさうな桜鯛
先駆けの鳥鳴く春の雪の中
○低く来て帰雁の鉤の乱れがち

新潟 高橋 ひろ

鉄入れて古草の根をくつがへす
耕運機今春の土まだ付けず
抽き取れる寝しなの一書春の月
弥生尽摺まり立ちの赤児へも
春月や一期一会の雲の形

新潟 高野 松風

また一本電線雪を落しけり
学校のリヤカー雪折れ積み余し
よくみれば畝曲りゐる雪間かな
囀のことに明るき朝かな
ひとところ土手の古草駒返る

新潟 森山 暁湖

寒昂叱咤するかに輝けり
吹雪く夜や電線が泣き軒が泣く
天が吼え木々泣く魚沼吹雪きけり
深雪晴櫟古木が瘤晒す

○早打ちとなりたる雪解雫かな

益子 光岡 れい子

木の芽風乾きよきかな生地の壺

まんさくの黄の溢れたる益子壺
初蝶や絵付師の筆なめらかに
梅が香や肋の浮きし奪衣婆
たんぼぼの光をはなつ大地かな

芳賀 大村 かし子

コロナ禍に戦始まり寒戻る
リビングにやはき光とフリージア
行き付けのスーバー移転二月尽
春愁や老いても素顔見せぬ母
再びの三月の地震深夜かな

宇都宮 阿久津 勝利

窯出しの百個の器風光る
春灯小芥子に入るる瞳かな
○一昼夜羽を休めて引く白鳥
馬蹄形の音楽堂や合格子
日の本の思ひ出幾つ帰る雁

栃木 上岡 佳子

栄養士のメッセージのせ雛の膳
○蠲や右折しますと救急車
テレワークの息子の揚げし蒔の莖

ちよつとこいの声する方へ初の試歩
うららかや夫の聞き入る古賀メロデー

佐野 増田 幸子

干し上げの^{渡良瀬遊水池 三句}みぎは薄氷日に揺らぎ

干し上げや四方の山々遠霞

末黒野や弧を描きたる群れ鴉

紅梅や格子拭きをる骨董屋

はんやりと円かな月を入り彼岸

佐野 加藤 季代

甲斐駒岳や力漲る葡萄の芽

ゆるびしは孵化の兆しか蝌蚪の紐

蝌蚪の紐あまたの命うごき初む

○葦焼の咆哮となる炎かな

葦焼の炎の怖しとも美しきとも

佐野 鍋島 広子

○三角の有三角の墓碑雉子鳴けり

内裏雛旧街道に背を向けて

橋脚の影に番の春の鴨

初音聞く向うの岸の葎かな

木道を歩く靴音菖蒲の芽

佐野 阿部 澄

水温む沼に連なる気根かな

捨て舟に色分けて咲く花董

倒木に詰め合うて立つ残る鴨

花冷えや鳥の足跡蛇行して

永き日の鯉泉石に上りたる

佐野 芝宮留美子

鳴き合へる白鳥明日は帰らむか

末黒野や現るる隠沼しろじろと

山裾にやさしき日の斑雪割草

祈願寺のあまたの礎石春日影

白梅やひとそと一族五輪塔

佐野 島田 和枝

百穴を抱く吉見や山眠る

動き出す薄氷朝の光載せ

葦の角浅瀬の水に見え隠れ

川底までとどく光や蟻の道

踏青や濡れるし石に躓きぬ

佐野 茂木 弘子

薄氷を端へ端へとささら波

野焼あと黒き大地のはればれと
いくすぢの沢水の音山の春
暖かや沼のなかまで呼吸根
干し上げの湖底を渡る木の芽風

佐野 亮 野

緑

阿左美沼の波の尖りに鳩現るる
初芹を濯ぐ野川や膝突いて
初蝶や日時計の針十時指す
吾が影が日時計の針すみれ草
畦川や葦の芽の影揺れどほし

足利 大 木

茂

○野火の灰静かに降れる夕べかな
横道を逸れ子ノ権現へ梅日和
柿を接ぐ父の形見の肥後守
道すがら新粉餅食べ午祭
漢籍の書肆は更地に梅匂ふ

土浦 澤

照

枝

竹秋や母を背負うて孝子像
桜待つ船待つ浦の風強し
水やりの先によるよる蜥蜴出づ

耕の向うに筑波山暮れ掛かる
生れてすぐ吹きとぶ雲や春北風

さいたま 山 本 右 近

紅梅の蕾つやややか小町寺
つまみ上げ向き改むる紙雛
川底に鳥の足跡水温む
経蔵の蔀戸を揚げ彼岸寺
菜の花に浮ぶ円墳昼の月

所沢 三 好 か ほ る

雛の日の京の旅なる木の芽和
御所雛明治の色の褪せぬまま
むざうさに置かれて紙の雛かな
池田屋の跡の碑鳥帰る
とつぜんに夜中の地震や冴返る

所沢 森 岡 恵 子

ほつほつと芽吹きそめたり梅古木
枯れ極む木立に日差し溢れけり
春泥を来て子等の声はづみけり
春日さす海石に立てば波寄する
春風や波打際の光り合ひ

所沢 南 雲 秀 子

花ミモザ揺らぐ御寺の大薨
溪流の滔々として梅真白
仏の座広ぐる畑や比企郡里
義仲の産湯井清し春の宮
観梅の苑に設ふ投句箱

入間 山 口 素 基

きさらぎや雪降り積もり日の差しぬ
あかときの頼朝桜紅濃かり
寂しさや母亡きあとの花ふぶき
ふりしきる吉野は花の雨となる
お遍路の白装束が青田ゆく

千葉 田 中 道 江

うかうかと陸月も過ぎぬ猫のひげ
竹の秋未の刻の大太鼓
微笑の不動明王のどけしや
外海そとうみの波のゆらせるあらせいとう
右近江左越前名草の芽

千葉 松 浦 陵 保

明星や離郷の朝の雪解道

臘夜に千葉に伝はる民話聴く
風光るポニーテールに紅リボン
辛夷咲く眼下に港見ゆる丘
春の駒蹴上ぐる土の黒さかな

酒々井 竹 澤 竹 里

花ミモザ潮騒を聞く漁師町
杏の香川中島へ届きをり
清水の舞台に立ちて花の雲
青不動さくら開花に笑まふかな
桜吹雪竹林の道踏みしめて

佐倉 内 海 保 子

春立つや紺の潮目の鹿島灘
すりこぎに露味噌匂ふ雨の夜
仏頂の寺に長居や梅日和
杉の春峠越ゆれば眼の痒し
白梅や睫のやうな蕊もちて

佐倉 大内 佐 奈 枝

防人の船出の跡や葦芽ぐむ
啓蟄の土塊とばし競走馬
百千鳥カラヤン住みし石の家

○アヴィニヨンの橋は柳絮にけぶりたる
柳絮とぶ市庁舎の鐘響きけり

佐倉 三屋 英 俊

藁混ぜの土に湯気立つ四温かな
耕や鋤刃の散らす土の切れ
田返しや深く鋤き込む枯穢
鳥雲ウクライナを思い二句に人シエルターに身を固く
鷹鳩になれと世界中の鐘

佐倉 横川 良 子

春疾風うねり通しの印幡沼
暗がりに姫の曼陀羅春の雪
陽炎や国を追はるる人の群
下萌や子規も辿りし成田みち
戦禍の世時を違へず花咲けり

四街道 奥 太 雅

二ン月や木の間明るき雑木山
一部屋は雛の間なり博物館
春愁や戦絶えざる星に生き
春泥をこぼしてゆけり畦塗機
溝川に声軽やかに墓交む

四街道 塗 木 翠 雲

閉店の貼り紙剥がす春疾風
新調の鋤ふりかざし耕せり
○漁労長の汽笛合図に若布刈る
探梅の丘に登れば軍馬の碑
一枚を大きく開く春障子

船橋 山下 良 江

紅梅の小枝に日差しやはらかし
枯芝の芽の立ち上がる日和かな
はらからの墓を巡れる彼岸かな
初蝶の枯草に入りそれつきり
春の日や路地に子ども笑ひ声

船橋 大 山 春 江

○ししおどしの音のたかまり木の芽雨
花ミモザ幸せさうに揺れてゐる
沈丁の香る仏間や真夜の地震
児の忌日勿忘草の咲きいづる
花冷や千歩に満たぬ万歩計

淡雪消え赤き朝日の出でにけり
船橋 赤 堀 洋 子

○堀走る小蟻たしかな影のあり
吹き溜るものの中なる仏の座
神鶏の新しき小屋なづな咲く
彼岸桜見あげて鵲と親しめり

船橋 久保村 淑子

椿咲く草間彌生の絵のやうに
癖つきし髪整へて雛納
三等の束子をもらふ春まつり
春燈や幼児眠氣に落とす箸
老犬は座り込みをり田芹摘む

船橋 片桐 帆一

川野辺の辛夷のつぼみ水明り
下萌の芝踏む足の余力かな
目玉焼黄身ふつくらと寒の明
お浸しの花菜菔応へやさしかり
春愁やちちチチ音す体温計

船橋 宮本 加津代

あいうえお書ける子となる日永かな
鉄棒をぐるりとまはり卒園す
春眠の夢に色なく音もなく

ひかり撒く尾びれ胸びれ水温む
春めくやさしたる傘の軽さにも

船橋 中嶋 久登

枝垂梅日陰の釘の絵馬重し
実朝の墓に新しチューリップ
また春をブレハブの赤ランドセル
○海隠す防潮堤や鳥雲に
上京の空也に逢ひに初桜

船橋 山本 とく江

奴風うなる運河の向う岸
恙なく米寿となりし雛飾る
花ミモザ寺裏に師を訪ひし日も
野梅散り己が洞まで真つ白に
潜りたる鳩の行方や蘆の角

船橋 内田 郁代

はぐれてはまた伸びてゐし榛の花
八十の夫へ大盛り雛のすし
消防団囲みて野焼はじまれり
みづいろの空へばちばち花山菜萵
沼土手の駒返る草みどり濃し

柏 古川 京子

薄氷はキエフの形田の明くる
どこからも富士山見ゆる町夕永し
露の薔花咲くやうに揚げにけり
作業場に文学全集芽木の風
阿弥陀堂のうしろの萩の根分かな

流山 穂 莉 照子

野水仙風変る時立ち上がる
咲き下りて影やはらぎぬ枝垂梅
ポンプ井のバケツの底に春の泥
〇くつきりと暗号残し蜷の道
天井の龍薄れゆく涅槃かな

浦安 須 賀 允子

梅東風やちちと人呼ぶ雀どち
春雨の音無き音に目覚めけり
雛段の前畏まる幼かな
春彼岸ふるさと遠くなりけり
白木蓮空襲に消ゆわが生家

浦安 田 中 幹也

一陣の風に薊の棘光る

〇宮古りて梅の白さの極まれり

草青むりハビリの足踏ん張れり
デイサービス帰りに温き春時雨
捨舟に蝶の戯むる俊寛忌

東京 名 和 政代

春の雨校庭の白線弾く
校庭の腕立て伏せや風光る
お守りを鞆に散歩春一番
熱あつのコロツケを待つ老遍路
下校時の青信号や蝶渡る

東京 藤 田 裕子

ゴム靴に土やはらかく春立ちぬ
持ち重る辞書に親しみ春の宵
アスファルトに滲む外灯春の雨
父の年母の年越え彼岸かな
地球儀のモンゴルすぐそこ黄砂降る

東京 赤 松 郁代

香を放つ杉の切り口山笑ふ
熊笹の雫となれり春の雪
種芋の糲殻つけて掘り出せり

○啓蟄や黄のスニーカー下ろしたり
○雛祭 吾は卒寿の誕生日

東京 島野 ひさ

春泥のなかなか落ちぬスニーカー
春マラソンアベベの素足想ひ出す
初花やあの子そろそろお兄ちゃん
緑道は水路の跡や花辛夷
万愚節で終つて欲しいこの戦

東京 加賀 葉子

お彼岸の雪に節電絵蠟燭
花曇木椅子にひとつ五円玉
枇杷の花影を土蔵に添はせをり
亡き夫に肩抱かるる春の夢
蝌蚪生まる終業式のビオトープ

東京 久留島 規子

雛あられ父の忌日の近づきぬ
鱒寿司を包む笹の葉かをり立つ
三軒の小さき建売牙返る
沈丁花かをりて雨の重さかな
道草の夫の提げ来る桜餅

東京 下 嶽 孝一

潮騒のかすかに聞こゆ彼岸寺
転びてはをさな立つ野や揚雲雀
春の画廊モンロー笑まふ艶ほくろ
退院の一步の大地草萌ゆる
それぞれの色を秘めたり芽吹山

東京 杉浦 一子

薄氷の残る木蔭や光さす
シールドルの淡き色にも春の夢
野焼終へ黒さ広ぐる土手に立つ
ぼんやりと光と闇を春の月
春愁や澄みし空欲し今日一日

東京 草間 三香子

古ひひな幼こはごは見てゐたり
三度目の接種終へたり黄の蝶々
小流れや馬酔木の花の影ゆるる
時刻む振子の音や木の芽風
古里の友と落ち合ふ春火鉢

東京 岡村 純子

蔓ねぢれ枝の先まで芽吹きをり

寺井なる雨にうるほふ実南天
寒晴や屋根職人の足かろし
朝の日に光散らすや霜柱
鶴頸に固き水仙ほぐれけり

東京 桑原優美子

学食にハラルのメニュー入學す
春泥にまみれし遺品ウクライナ
春風や路面電車の扉開き
吊革の腕見て目刺買ひにけり
春ゆふべ鴉の黒の艶めけり

武蔵野 砂地 宏子

筋雲の形さまさまに二月尽
瀬戸内の橋わたりつぎ春の磯
やうやくに鶯餅の並びけり
初蝶^{ウクライナ二句}のとまるものなし戦火の野
残留の父へ頬ずり春寒し

調布 大林 彬彦

吊橋の引き合ひ止めて山笑ふ
修理して津浪禍の雛飾らるる
みちのくの復興の里植樹祭

原子炉の真夜の爆発春の夢
捨て処なき核廃棄物春暑し

町田 広瀬 俊雄

紅梅の地をすりてより香りたる
沼底に白き苞あり水芭蕉
山あひの岩棚奔る春の水
花辛夷一氣に咲けり雑木山
春寒し人道せまきウクライナ

町田 桔梗 純

梅二月漢字ドリルに子のくせ字
朝寝してブランチなどのたまへり
白木連白塀囲ふ迎賓館
四谷土手花の蕾のまだかたし
花の時紅麴味噌封切らむ

日野 喜多尾 明子

こぶしの芽引越しの荷の積み込まる
春北風や道路工事の穴覗く
本棚に遺灰の小壺花の冷
受話器置いて後の昂り紅椿
如月の日の斑を鳩と分かち合ひ

横浜 西 本 才 子

立子忌の空に浮雲ありにけり
野遊びの棒持つ少年先頭に
大池に子の声弾む蘆の角
小綬鶏や海へ傾く松林
三三五五笑まふ袴の卒業生

横浜 川 越 昭 子

山水の流れの早し花あやめ
赤椿白椿咲く我が庭に
箒目の庭美しき寒あやめ
祖父の字の提灯ありし春の寺
朱木蓮夕日に蕾ふくらみぬ

横浜 大 橋 雅 子

寒肥の穴掘り一と日暮れにけり
賑やかな鳥に揺れある白木蓮
動物園鬼縛の花ひとつそりと
一本づつ茹で若布吊る手際かな
吊し干す若布に漁港香りけり

横浜 山 崎 郁 子

振袖も飾る旧家の雛祭

奥能登にかつて拉致あり春怒濤
雪起し鯔見に蜚の藻人形
母あらば紅白緑の菱餅を
犀川の波を豊かに雪解水
横浜 田 賀 榎 恵

夫の忌の過ぎ白木蓮の咲き初むる
囀や窓も障子も木々の影
庭石のやはらかになり春の雨
七いろの貝のボタンや春愁ひ
小流れに小さき橋あり春の野辺
横浜 小 板 橋 泰 山

吊し雛古き栗木の曲がり梁
幼子を湯気ごと受くる春の暮
駄菓子屋の酢烏賊をしやぶる日永かな
梅日和とさか揺すりて軍鶏走る
春夕焼閉鎖間近の古駅舎
川崎 新 妻 奎 子

草萌や子は靴下を脱ぎたがる
白梅の多きこの地に住み慣れて
大輪のアネモネばかり低き墓

少年のでんぐり返し厩出し
折れし骨付きたる画像初桜

川崎 大久保 進

みちのくの風なほ重き臥龍梅
薄墨の恩師の訃報春の雪
啓蟄やマスクにこもる大欠伸
植木市松は樹幹の振れるて
ママチャリの籠にごろりと春キャベツ

鎌倉 恒川 清 爾

卒業やゆつくり下る校舎裏
鳥雲に三一一の浜静か
○被爆地の長崎入りは絵踏めき
遍路ゆく空也の喉の仏揺れ
海望む頼朝像や鳥雲に

横須賀 織田 みさゑ

腰曲げて修羅巻く野火を叩きけり
鯉ひそと丸く輪を吐き水温む
京菓子を色よく添へて雛の宵
介護保険わからぬままに梅三分
立春や納屋に掛けある農暦

伊勢原 佐藤 和子

土手焼いて川いきいきと流れけり
佐藤千晴さんを悼む三句
紅梅や写真の友のVサイン

かぎろひの江の電に乗り旅立てり
七里ヶ浜沖のまばゆき二月尽
古草や一人にあまる座禅石

秦野 佐藤 嘉洋

誕生日鰯の煮付薄味に
菜の花の土手に園児ら黄の帽子
紅梅の枝に播餌の小鉢吊り
日輪や鉢に溢るる桜草
雄啼いて遠富士のぞく峡の空

静岡 大村 峰子

剪定の梯子に一つ石を支ふ
持ち呉れし物より落つる春の泥
登校児薄氷踏みに戻りたる
違はずに黄より開きしクロッカス
引く鳥の出入り激しき一樹かな

静岡 海野 みち子

啓蟄や鍬鎌洗ふ外流し

うららかや曾孫の声のスマホより
切手買ふ局に昭和の内裏雛
大きくさめ素つとんでゆく膝の猫
出合ひたる仔鹿としばし見詰め合ふ

静岡 宮崎知恵美

門前の椿赤々山の寺
古草や神社の跡の石階段
隣より大きな声する鬼は外
春光を浴ぶ廃校の尊徳像
春寒や夫の帰りを待つポトフ

静岡 長島

操

冬の鶴ダム湖を覆ひ隠したり
切り岸に椿膨らむ渡船待ち
切干しの大根乾し上げ日脚伸ぶ
丸くなり茶畑へ走る狸の子
表札の夫の名薄れ寒明くる

静岡 岩崎武士

きのふよりひと節伸ぶる初音かな
薄紙で眠りに付かせ雛納む
げんげ田に土地改良の杭打たる

彼岸会や候文の祖父の文
蠶ぐもり貨車連結の鉄の音

静岡 藤原千代子

籠作る春めく日差し編み込んで
豌豆を一ト鉢咲かせ籠を編む
地に触るる蓄真白や枝垂梅
暖かや工具総身に若棟梁
おほかたはビニール紐の古巣かな

静岡 荻野加壽子

朽ちかけのベンチ二つや鳥帰る
春水に木の間越しなる空の青
一しづくより春水の長き旅
弁当に出し巻卵青き踏む
水桶の水の平らか春の昼

静岡 小川明美

道譲り合うて四温の遊歩道
羽衣の松は二代目猫生まる
大試験の海洋学部渡船着く
校庭に糞始業のベル響く
銕介の木白の括れ寒波急

静岡 藤本 節子

長尾鶏の黒の艶めき春遅々と
足裏に列車の響き蓬摘む
二歩三步青芝歩む襦袢の子
走り出す子の黒髪や風車
天水に沈む芥や涅槃西風

静岡 大長 文昭

○柄の長き物は地に伏し農具市
耕や時にいくさの骨出づる
海舟の隠遁の里梅真白
伏流水湧くみなもとへ青き踏む
蛇出でて縞くばませて垣のぼる
満作や漢無口に歛振るふ

静岡 加山 ひさ子

誕生日三十本のスイートピー
筆立に萩筆古りぬ利休の忌
春星の溢るる池の水鏡
飲んだくれの顔の緩みや大石忌
春の雲見る見る消えてしまひけり

静岡 吉野 美智子

春耕の土あらあらと裏返す
犬ふぐりへりコプターにまばたけり
杖つきて初蝶の白目で追へり
もう誰も住まぬふる里春の雲
はこべらや電車の音の響く路地

静岡 石川 裕子

初恋の人てふ和菓子春日和
鳥突き花卉の欠けし紫木蓮
○裂織の織りなす色や春日差
蟻出づる番屋の土間のでこぼこを
港湾にずらりと倉庫犬ふぐり

静岡 望月 敏男

猿除けの柵に囲まれ耕せり
涅槃図に父似の顔を捜しをり
試着室鏡の中の新社員
春風や喇叭のやうな犀の耳
上棟の掛矢の響き春兆す

静岡 本多 ひとみ

初詣長蛇の列の最後尾

○初稽古大海原へ声揃へ
冬晴や富士の山襷あらはなる
裸木に掛くる帽子の置き去りに
往來の人皆寡黙雨凍つる

射水 成瀬真紀子

忌日來る言葉のやうに春の雪
春一番裏地の稜を光らせて
校長も來て校庭の雪を割る
○白鳥引く光増したる劍岳
田に至り野火の匍匐の止まりけり

金沢 岸川素粒子

春昼やG線切れしバイオリン
○夢で死に現に生きて春炬燵
青柳や橋は目出度き名をもてり
其角忌や句に添ふ花の色は何
月おぼろ千手失せたる観世音
春浅し造花のバラは刺持たず

金沢 中條睦子

ふるさとを離るる手には猫柳
○梅匂ふ藩政時代よりの路地

アネモネの五彩を活けて師を偲ぶ
のどけしや紅茶待つ間の砂時計
春満月地球の果てに戦火あり

金沢 今越みち子

梅花祭牛もおめかし手綱して
兼六園梅の遅速を愛でにけり
危な気な丸き石橋梅林に
雪吊解く芯の丸太の運ばるる
雨と風つのるばかりや入り彼岸

金沢 伊川玉子

紅椿湖の香の寄す間垣村
畦焼のけむりに追はれ雀どち
芽柳や火の見櫓は袴腰
木蓮の冬芽ひしめく彌撒の鐘
毛糸帽脱ぐ子毬栗頭かな

金沢 伊藤美音子

閻王に朱欒一顆のあかりかな
○純子句碑木の芽起しの雨匂ふ
しんがりの遅れがちな帰雁かな
山羊繫ぐひも長々と春の草

春愁や金糸ほつるる加賀てまり

金沢 高田たみ子

米とぐをすつかり忘れ日脚伸ぶ
靈沢の底に小銭や冴返る
春光や掃除日和と男衆
雪解川立山連峰くつきりと
〇満々たる川の濁りや鳥帰る

金沢 豊田高子

〇可惜夜を下戸も交じりて花の宴
春寒や茶屋街に猫捜すビラ
穴出でし蛇水の香を嗅ぎ分けて
若き日の写真を展げ春炬燵
初燕医王嶺の雲ほどけゆく

金沢 松井佐枝子

〇火鑕火の白煙揚がり山笑ふ
薄闇に仏をろがむ暖かし
胸うすき半跏仏笑み春灯
菊炭を焼べる草庵初音かな
涅槃図の吾が干支鼠真ん前に

〇藍色の町並抜くる雪解川
待ち切れずシャベルに起す春の土
自転車の補助輪外す春隣
咲ききつて花首重きヒヤシンス
寝ねがての闇夜に走る春の地震

金沢 河野尚子

朝日洩れ雛の屏風に雛の影
鳥帰る聞き慣れし声渦に無く
春泥を跨ぐに歩幅足らぬかも
フリージア包む新聞地震の記事
一面の麦の芽青し加賀平野

内灘 塩井志津

ひねもすを雪解雪の古廂
馬場跡は石段のみや木の芽風
〇裂織の音に明け暮れ余寒かな
蔭の蔭なぞへの朽葉押し上げて
渦晴れて巢組み始むる鶴こうのとり

七尾 谷渡末枝

その朝の鏡に見入る卒業子

原子炉の空遠廻りして帰雁
土の春鋏鎌の柄を新しく
税務課に順番を待つ春シヨール
春炬燵声出して読む死亡記事

敦賀 倉谷 紫龍

春を呼ぶ田起し神事だのせ祭
春の炉や太閤釜の遺る茶屋
野火煙横一線の薄暮かな
蟹の村数珠繰る御堂春動く
大店の帳場の真中春火鉢

敦賀 倉谷 ます美

春の炉や毛皮を敷ける家長の座
作小屋の目貼剥がすや雲動く
馬の尻ボンと叩いて厩出し
浦曲ゆく磯に笊もつ海苔搔女
春兆す薄茶のお菓子萌葱色

敦賀 鶴田 勝子

春シヨール紺屋に買ひぬ縹色
薄氷舟屋の汀せりせりと
牛十頭雄叫びあげて厩出し

戦場の兵士弔ひ野を焼ける
曲家の厩日の差す落の莖

敦賀 中川 雅月

離れ業春の広場の曲芸師
袴に鷹の羽紋の年男
赤駒の厩出したる大朝日
谷沿ひに火の立ち登る野焼かな
白魚のレース纏ひしつぶらな目

大阪 入山 繁幸

風花や子に初めての雪結晶
麗らかや一人胡弓を日のたまり
春日映ゆ淡路瓦のいぶし銀
貝寄や茅渟ちづなの海行く着陸機
亀石明目村も目蓋重たき目借時

徳島 福島 吉美

築山の蘇鉄に弾け春みぞれ
掛け替へし裸婦の絵画や日脚伸ぶ
五指の色違ふ手袋吊し干す
春愁や核廃絶の燭灯す
露座仏の膝に転がる雛あられ

徳島 村上 和義

底冷えの蔵に息づく味噌麴
モンローの赤きスカート春の風
古池の水面ぶくぶく蝌蚪生る
○理不尽な戦いつまで春の泥
平山の駱駝の絵にも黄砂かな

徳島 宮西 修一

春荒や睨み合ふ猫身じろがず
太鼓橋を行けば城垣柳の芽
眼の清しマスクの中の卒業子
これがまあ躍り口とや利休の忌
水温む芝に転がる白い靴

徳島 平岡 功

俘虜偲び墓碑へ供へし梅一枝
縄文の火焰土器見る建国日
雛祭はらからのこと母のこと
母のごとやはらに光る春の海
○藍を蒔く鳥語溢るる日なりけり

石井 木内 マヤ

卒業の子に南国の雪積る

幸せと思ふ白菜四つ割りに
稚魚の影走る川面に春兆す
目借時蛙嫌ひの夫であり
先生の似顔絵を書き卒業す

室戸 安岡 みさき

遍路待つお杖洗ひの水置きて
岬宿を風懷に遍路発つ
投句箱置きし岬の遍路宿
脱藩の道を辿りて花探る
指先で塗る頬紅や花衣
○菜の花を添へて仕上る皿鉢かな

高知 仙頭 宗峰

探梅や万歩あるくを旨として
コロナ禍や今日も札所に遍路見ず
斯許りの風に颯く初音かな
廃校の池縦横に蜷の道
志士刑場滲み出るかに下萌ゆる

長崎 丸本 祥夫

靴下の首を丸めり春炬燵
去りてまた戻る風あり初燕

初燕去來の越えし峠より
満開や涙がこぼれないやうに
葉の花の岬へ汽笛茂吉歌碑

那覇 大湾 宗 弘

空に白波少年の日の蜃気楼
蜃気楼ペルシア市場のランプ売り
抱卵の鳩の鼓動や牙返る
夕蛙やがて雨来る那覇四町
砲煙の中継目刺焦しけり

那覇 比嘉 半 升

菜の花や猫の住みなす美術館
○ひんぷんのうしろ赤土葱坊主
火屋磨くその手幼し春蚊出づ
耕の影や黙認耕作地
清明の風の仕上ぐる墓普請

那覇 當 間 シ ズ

塀を来て初蝶すぐに出でゆけり
整ひし春甘蔗の畝長し長し
啓蟄やおしやれ着一つ買はむかな
トランペットドレミドレミや春の風

しらじらと首里の城壁おぼろ月

那覇 中 本

清

島唄を流し豆腐屋黒木の芽
垣内に緋織る音花マンゴ
伸子張る風うららかに紺緋
若牛の黒艶みがく桜東風
横綱牛の蹴る土塊や松の芯
料峭の鱗を散らす海人の妻
観音の御腰しなやか春の雨
ミサイルに子の死ぬキエフつちぐもり
囀の励ましのあり下り坂
如月やひよこの色に月円か

西原 宮 城

勉

お詫びと訂正

5月号21ページ上段 大林彬彦様の五句目に
佳句の○印が落ちてしまいました。

○基地と墓地隣り合ふ島牙返る

お詫びして訂正致します。

謹 告

岸川素粒子氏（創刊同人・金沢）は、ご療養中のところ、令和四年三月二十三日、逝去されました。

享年九十六。十日前に誕生日を迎えられたばかりでした。

「風」の同人になられたのが昭和二十六年、今日まで大先輩として長年のご指導をいただきました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

万象俳句会

万象基金のご報告

匿名	一・五口
匿名	一五口
匿名	一五口

（令和4年3月28日～4月18日・受付順・敬称略）
「万象」の発展のため、大切に
使わせて頂きます。

万象俳句会

同人会だより

第十七回「万象」同人会総会、無事終了

4月15日開催の総会には、51名のご参加を戴きました。「万象」新体制がスタートしたこの春、内海良太新名誉主宰、江見悦子新主宰からの挨拶があり、加えて97歳の山本純子同人の元氣なお姿と俳句への情熱に拍手喝采でした。今回の総会の内容の一つは、同人会役員の交代でした。柳澤会長はじめ役員幹事の皆さまには任期を一年延ばしての同人会運営、お疲れさまでした。今日の開催に至ったのも皆様のご尽力のお蔭です。心より感謝申し上げます。二つ目は、本年度の活動計画・予算案の審議です。「万象」5月号「新会長あいさつ」で示しました活動計画が承認され、また御欠席の皆さんには送付しました予算案が原案通り承認されましたことをご報告させていただきます。三つ目は、中山純子記念俳句賞の表彰です。

第二回の塩井志津同人（代理人）、第三回の曾根満同人、並びに準賞の岡本敬子同人（代理人）、佳作の福島吉美同人、第四回の豊田高子同人、佳作の村上和義同人にそれぞれ色紙・短冊・副賞の九谷焼小皿セットが贈呈されました。四つ目は、相互の研鑽と親睦を図るための「句会」です。内海良太名誉主宰特選

満開の花を残して校舎閉づ

福島 吉美

江見悦子主宰特選

花月夜少し開けおく母の闇

豊田 高子

東京の雨も小降りになった四時過ぎ散会となりました。

同人作品の佳句

内海良太

藍色の町並抜くる雪解川 石川純子

町並を抜ける雪解川は金沢の浅野川だろう。春が近づくと、川は水量豊かで雪塊を浮かべながら流れも速い。日によつて雪解川の蒸気が町を覆うことがある。朝方だと乳色に、午後には青みがかつて古都金沢らしい雰囲気となる。

新幹線から夕方の金沢の雪解の家並全体が藍色に見えたことがあつた。まるで蕪村の「夜色楼台図」の画のようだった。

早打ちとなりたる雪解雪かな 森山 曉湖

今冬は北陸から東北、北海道の日本海側の積雪量は記録的だった。中でも暁湖さんの新潟県南魚沼の豪雪は連日TVで報道されていた。2月も半ばになってやっと日差しが出るようになり屋根の積雪も緩み始めてきた。落下する「早打ち」の雫に時の経過があり、屋敷の方々から聞こえる音は春の飲ひの交響曲でもある。

裂織の織りなす色や春日差 石川 裕子

裂織の音に明け暮れ余寒かな 塩井 志津

6月号に「裂織」の句を二つ見つけた。お二人で裂織の工房を訪ねたのかも知れない。裂織は使い古した着物や古布などを活用した織物で、布が貴重な時代の地方では多くの家で織っていた。

一句目、織り込む布の色で、意図しなかった色合いの布地が出現。春日差に映る色彩の美の意外性に感嘆している。

二句目、最近の裂織人気で需要が多いらしい。昔の品物の無い時代とは違うが、機音は昔と変わらない。

理不尽な戦いつまで春の泥 村上和義

ロシアのウクライナへの軍事侵攻から始まった戦争。雪どけの道を進む戦車や民間人の被害のTV映像に背筋が凍る。

村上さんの言うように、世界には紛れもなく理不尽で不条理なものもが充満している。戦争、疫病、自然災害。今、これらが現実のものとして人間に襲ひ掛かっている。それは不条理で、つまり、理不尽であり馬鹿げている。

村上さんは、理不尽に抗しながら人間はどう生きるべきかの思索をますます深めている。

藍を蒔く鳥語溢るる日なりけり 平岡 功

平成20年春、「万象」同人会総会が徳島市で開かれたとき、木暮剛平さん、横井博行さんと三人で市内の藍染屋敷を見学した。藍の乾燥葉を発酵させて作った「すくも」や「藍玉」などを見、地中に埋めた藍甕に糸を浸けて染色する工程を見てすっかり分かった気になった。ところが平岡さんの句を見て、ものの始めの種蒔きを忘れていることを教えられた。蒔りの2月頃種を蒔き、4月中旬に定植すると歳時記にあった。生半可を反省させられた。

三角の有三の墓碑雉子鳴けり 鍋島 広子

「路傍の石」の作者山本有三は今の栃本市出身。墓は市内

の近龍寺にある。何年か前にお参りしたことがあるが、うつかりして墓の形はおぼえていなかった。今思うと三角の墓碑は、路傍の石を象徴していたのだろう。

近くの萬福寺には清貧孤高の画家、田中一村の墓があった。この辺は市内では森閑とした寺町で春の雉子の声も時々聞こえるのだろう。

漁労長の汽笛合図に若布刈る 塗木翠雲

貝類や海藻類の資源保護のために、漁業組合によって採取の日時や量が定められている。句は解禁日の様子をよく描写している。若布取りの船は汽笛の合図で一斉に自分の漁場に出漁する。組合事務所からどんな汽笛の音を発したのだろう、「漁労長の汽笛」が面白い。作者も面白がっている。

ひんぶんのうしろ赤土葱坊主 比嘉半升

「ひんぶん」というと名護市の「ひんぶんガジュマル（榕樹）」を思いだす。ひんぶんを広辞苑で引くと、「沖縄で家の入り口と母屋との間に作る石造りの壁」とあるから、句は屋敷内の赤土を耕した家庭菜園かも知れない。ルビはないが赤土は「アカンチャ」と読む、なんと調べのいい句だと思った。詩歌の醍醐味は調べにあると言っても差し支えない。

ついでに、名護の「ひんぶんガジュマル（榕樹）」は、樹齢250年以上の大樹。その大樹の前に建つ石碑の形がひんぶんに似ているので、「ひんぶんガジュマル」というそう。

葦焼の咆哮となる炎かな 加藤季代

葦焼は渡良瀬遊水地の春恒例の「ヨシ焼き」だろう。害虫

駆除や良質なヨシの育成などが目的で組織的に行われる。今年は3月5日に行われた。

真つ赤な炎が這い、黒煙が天高く舞い上がった様子がTVや新聞で報道された。現地で実際を見れば相当な迫力だろう。暗喩の「咆哮となる」に作者の昂ぶりがある。

夢で死に現に生きて春炬燵 岸川素粒子

岸川素粒子さんが3月23日逝去された、2月末に届いた句稿の最後に「肺ガンで入院しました。乱筆御許し下さい」とあったので心配をしていた。その後は友人の代筆の投稿があったのでなんとかと、ご回復を祈っていたのだが残念なことだった。

岸川さんは昭和26年の「風」同人で、中山純子先生と同期である。岸川さんは長年、北陸俳壇の重鎮として活躍されていて、私にとっては雲の上の人だった。「万象」にはこれが俳句という作品を毎月見せていただき、私の乏しい鑑賞を許してくれていた。そればかりかご遺族からのお手紙で、「父は『万象』での毎月の選を楽しみにしていて、自分の作品に興味を持ってくれたのが嬉しく、作品を作るときの励みや、やり甲斐があったと言っていた」と伺い、ありがたく選担当者としての冥利を感じた。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

第四回 中山純子記念俳句賞 発表

正賞 牛角力 豊田高子

佳作 お四国の路 村上和義

特別賞 よろずよ橋 高橋ひろ



豊田高子 氏

第四回中山純子記念俳句賞は審査の結果、右の通り決定しました。

万象俳句会
万象同人会

牛 角 力 豊 田 高 子

晴れ渡る越後三山雁の棹
秋暑し棚田の池に鯉跳ぬる
紅葉晴村にとよもす牛角力
勢子だまり筒の猿酒回し飲み
牛合す白帝の地に浄め塩
いぼむしり取組表に斧翳す
牛合せ秋天を突く勢子の声
ままほりの牛に残暑の臭気かな
草の花触れて脈打つ牛の肚
闘牛の角の血拭ふ今年葉
角突きの果てて土俵を赤とんぼ
田仕舞や牛舎を包む山の風
秋風や地震の断層むき出しに
地震跡に育つ枝豆莢つぶら
鎮もれる信濃の流れ暮早し

感謝の言葉

豊田高子

この度は、思いがけなく第四回
「中山純子記念俳句賞」を頂き、
身に余る光栄と存じます。

ここに主宰を初め選に当たられ
ました諸先生方、同人会の皆様に
心より御礼申し上げます。

作品は、新潟県山古志村に千年
も続く闘牛を見に行った時の作品
です。十月というのに暑い晴天の
日でした。

このような拙い作品に暖かい評価
を頂き心から感謝申し上げます。

これを節目に初心に返り、純子
師の教えを守り精進して参ります。

佳作 お四国の路 村上和義

発心の一番札所梅三分
薄氷を叩いて発てり札所道
紀伊の国遙かに見えて若布干す
菅笠の老いの背を押す花菜風
大師堂までのゴンドラ山笑ふ
本堂の華鬘を揺らす春の風
初つばめ足湯に交はす国ことば
老鶯の艶ある声に力あり
接待の一気飲みするソーダ水
空海の修行の岩屋蟬しぐれ
ちちろ鳴く善根宿の仕舞風呂
雲辺寺瀬戸の夕焼ひとり占め
ささくれの杖を休める遍路宿
御厨人窟に小さき祠初日さす
春の泥乾く脚絆や結願寺

特別賞 よろずよ橋 高橋ひろ

ケンケンパッしてぶらんこの順を待つ
遠野火の真暗々の山背負ふ
どくだみが咲く厄介で調法で
庭歩きして来て茗荷竹刻む
年の差は数日万代橋の夏
八月やはきだめ菊の名は哀れ
砂浜に赤き王冠夏終る
馬具干して厩空つば鰯雲
冬のバラ尊きものの如く剪る
着ぶくれて夜更し癖は死ぬる迄
寒夕焼早く早くと呼ばれけり
捨て雪を転がしてゐる波頭
風花の地に消えたとき空仰ぐ
健康の一事が万事屠蘇祝ふ
人避けし裏道も人初弥彦

選 評

好感の持てる作品が多かった

内 海 良 太

第四回中山純子記念俳句賞に34編の作品を寄せられたことを同人会会長はじめ事務局スタッフと共に選考委員の一人として喜んでいきます。

この賞は中山純子先生の業績とお人柄を偲びつつ同人会会員相互の研鑽、親睦を図るという趣旨で始めたものです。

そして何度でも応募が出来、何度でも受賞が出来るという大らかな賞です。これからも楽しみながら参加されればいいと思います。

私が選んだ三作品の他にも好感の持てる作品が沢山ありました。来年も楽しみます。

1位「牛角力」 豊田高子さん

新潟県長岡市山古志村の国指定重要無形民俗文化財の「牛の角突き」での属目で、15句それぞれ写生が行き届いて臨場感が溢れる力作でした。

勢子だまり筒の猿酒回し飲み

2位「お四国の路」 村上和義さん

空海の修行の地、初日が空海の口に飛び込んで来る感じ。

御厨人窟に小さき祠初日さす

3位「佐渡の秋」 島野ひささん

佐渡に行ってみたくなるような、いい句がありました。

灯を消して星飛ぶ佐渡の夜の窓

行動制限の中、多彩な作品群を喜ぶ

小 林 愛 子

豊田高子さん「牛角力」受賞おめでとうございます。（草の花触れて脈打つ牛の肚）（秋風や地震の断層むき出しに）等に注目、山古志村の闘牛は5月〜11月であるが、それでも側面から捉えるなどして季語に工夫が欲しかった。

1位「雪しんしん」 岡本敬子さん。豪雪の下で暮らす人々の哀歎を描く。括弧の文は不要、一つは前書きで。（雪しんしん見あぐる程に天心へ）（豪雪の十日続きて人ちさし）。

2位「お四国の路」 村上和義さん。自身の遍路一年間の記録、意外な発見も欲しい。（紀伊の国遥かに見えて若布干す）。

3位「去年の銀河」 前田貴美子さん。日常と詩の接点を掬いあげた。沖縄では季節がむつかしいであろう。（ていねいに食みて箸置く蝶の昼）（うしろみな影を集むる秋の声）。

4位「よろずよ橋」 高橋ひろさん。特別賞受賞おめでとうございます。新潟市を貫流する信濃川に架かる万代橋を中心

11	10	9	7	7	6	5	4	3	2	1	順 位
たまゆら	鹿 島	水のこゑ	餅 花	鳥 の 秋	雪しんしん	去年の銀河	風	絹 の 道	お四国の路	牛 角 力	題 名
石川純子	内海保子	中條睦子	福島吉美	岩崎武士	岡本敬子	前田貴美子	伊藤美音子	成瀬真紀子	村上和義	豊田高子	作者名 選者名
	3		6					7	9	10	内 海 良 太
		4			10	8	5	1	9	6	小 林 愛 子
	4		8	7			6	9	3	10	福 島 せ い ぎ
		7		5		10	9	4		8	江 見 悦 子
7	5		3	6			4		10	9	柳 澤 宗 正
	3	4			5	10	7	8	6	9	榎 本 文 代
6		2	1		10			7	9	8	井 村 和 子
13	15	17	18	18	25	28	31	36	46	60	合 計

に青春と今の明け暮れを淡々と描く。〈どくだみが咲く厄介で調法で〉(着ぶくれて夜更し癖は死ぬる迄)。

地方色豊かな作品

福島 せいぎ

第四回中山純子賞に輝いた豊田高子さんの作品「牛角力」は、34編の応募作品の中で群を抜いていた。なんと読み返しても、作者の感動がそのまま胸に迫ってきた。付焼刃の句作でないことが15句すべてに表現されていた。

「牛角力」という地方色豊かな行事を楽しんでいる人たちの空気感までが伝わってくる。

紅葉晴村にとよもす牛角力
牛合せ秋天を突く勢子の声
角突きの果てて土俵を赤とんぼ

佳作に選ばれた村上和義さんの作品「お四国の路」は、四国霊場八十八カ所巡りの「遍路」に取材したもの。「お遍路」と呼ばれる修行の旅をさりげなく作品にまとめている手腕を評価したい。

初つばめ足湯に交はす国ことば
ちちろ鳴く善根宿の仕舞風呂
春の泥乾く脚絆や結願寺

24	24	23	21	21	20	17	17	17	15	15	14	13	11
玉 の 春	菩 提 樹	水 の ほ と り	浅 き 春	雪 間 草	避 難 場 所	ダ ム の 村	寒 紅 梅	錦 木	寒 明 け	春 き ざ す	佐 渡 の 秋	炎 上	よ ろ ず よ 橋
神田美穂子	高田たみ子	藤原千代子	大内佐奈枝	望月敏男	谷渡末枝	長島操	奥太雅	入山繁幸	大村峰子	下嶽孝一	島野ひさ	吉中愛子	高橋ひろ
	1				2						8	5	4
									2			3	7
			2			1	5						
		2	1						6			3	
					2					8	1		
1													2
				3		4		5					
1	1	2	3	3	4	5	5	5	8	8	9	11	13

抒情性と写生の力

江見悦子

1位「去年の銀河」前田貴美子さん。春から新年までの暮らしの断片を詩情豊かに詠んだ。取合わせの妙、措辞の間合いのよろしさ、自然との交響が魅力的だった。〈ていねいに食みて箸置く蝶の昼〉〈くるぶしをぬらす野の風蚊食鳥〉〈枯薦の絡まり合へる微光かな〉

2位「風」伊藤美音子さん。身辺りの自然との対話を軸に、一年間を詠んだ15句は抒情に溢れ、自然でなだらかな詠みぶりには作者自身が息づいている。〈帰る雁遠嶺は雨となりゐしか〉〈桐の花息吐き切つて落ちゆけり〉〈純子忌や蓮ふつくらと朝月夜〉

3位「牛角力」豊田高子さん。越後山古志の行事「牛の角突き」の一日をまとめた。風土性豊かに、牛と勢子たちの血のたぎる闘いを写生した力量に感心した。〈草の花触れて脈打つ牛の肚〉〈秋風や地震の断層むき出しに〉

「お四国の路」には最後まで迷ったが、季語の配列に疑問が残り残念だった。他の作品にも同様の疑問があった。季語については、記憶に頼らず歳時記で確認して欲しい。

揺るがぬ熱意に感謝

柳澤 宗正

第四回中山純子記念俳句賞は長引くコロナ禍と度重なる寒波で心配していましたが、一回目の44名に次ぐ34名の応募があり、同人の皆様の変わらぬ熱意とご協力に感謝いたします。今回は石川県支部が実質的に業務を担当され、同人会事務局がサポートしましたが、次回より全面的に石川県支部に移行します。

選考結果は別表の通り授賞が決まりましたが、今回より主宰の提案で「万象俳句賞」に倣い90歳以上の応募者には敬意を込めて特別賞を出すことにしました。

今回も選考には四苦八苦しましたが、私のポイントはテーマの有無と纏まり、余情を重視したつもりです。1位村上和義さんの「お四国の路」、作者の高揚感が伝わってきます。2位豊田高子さんの「牛角力」。新潟県山古志の牛の角突きとありますが、臨場感溢れる作品です。3位は下嶽孝一さんの「春兆す」。中山道沿いの景観を詠んだ作品。4位は石川純子さんの「たまゆら」四季を詠んでいるが、そこはかたない淋しさ、孤愁に惹かれた。5位は岩崎武士さんの「鳥の秋」。十三種類の鳥を観察しそれぞれ一句を成している。選外にも惹かれる作品は多々あり、10作品に絞りこみ順位を付けるのは非常に難しく、選者の力量が問われていると痛感し

ました。今後も諦めずに純子賞に挑戦し、応募してほしいと思います。

数多の応募作品に感動

井村和子

1位「雪しんしん」岡本敬子さん。雪深いこの大地の自然と、雪を厭わず雪と相和する日常風詠。独自の感性と表現力が醸す一連の作が心に響いた。

雪しんしん見あぐる程に天心へ
雪をんなの哀しみ怒り吠く声も

あめつちの自足雪野の耀へる

2位「お四国の路」村上和義さん。四国遍路の道辺の風情を四季にわたって詠みあげた力に注目。ただ一連の作品の後半に「季節」が乱雑に配列されたのが惜しまれる。

薄氷を叩いて発てり札所道

菅笠の老いの背を押す花葉風

初つばめ足湯に交はす国ことば

3位「牛角力」豊田高子さん。中山純子賞に輝いた作、おめでとうございます。即物具象の写生、鋭い眼力を持った作家である。(牛合す白帝の地に浄め塩) (いほむしり取組表に斧翳す) (闘牛の角の血拭ふ今年葉)

選を終えて

榎本文代

1位「去年の銀河」前田貴美子さん。季語の幹旋が巧みで日常の出会いの中から掬いとった句の深い詩情に惹かれた。

座布団を返して辞せり鳥曇

くるぶしをぬらす野の風蚊食鳥

秋草や胸に記帳のペンもどす

2位、「牛角力」豊田高子さん。牛の角突きが秋の風景の中で詠まれた。作品は手堅く纏められて風土色豊かである。

3位、「絹の道」成瀬真紀子さん。美しいタイトルは作者の住むエリアのよう。ていねいな写生で風土に触れている。

落人の榎菓子硬し春時雨

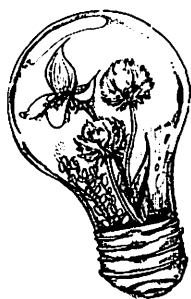
百年の練糸に艶春の雨

その他では岡本敬子さん「雪しんしん」のチャレンジ、高橋ひろさん「よろずよ橋」の自在な詠みぶりが印象に残った。

第四回 中山純子記念俳句賞に応募された方々

桔梗 純	広瀬 俊雄	松浦 陵保	下嶽 孝一
石川 純子	南雲 秀子	入山 繁幸	村上 和義
平岡 功	宮西 修一	伊藤美音子	奥 太雅
岡本 敬子	豊田 高子	成瀬真紀子	中條 睦子
高田たみ子	岩崎 武士	望月 敏男	小川 明美
神田美穂子	吉中 愛子	大村 峰子	前田貴美子
藤原千代子	島野 ひさ	高橋 ひろ	長島 操
丸本 祥夫	大内佐奈枝	内海 保子	谷渡 末枝
福島 吉美	本多ひとみ		

(以上34名 先着順)



約 束

前田貴美子

ほほづゑにつかはぬ右手初蝶来
 白湯に溶く今日の一錠遠蛙
 白蝶のふれてかぎろふ水たまり
 命日の過ぎたる雨の草青む
 春雷の淡きに雨の上がりけり
 鳥語散る袋小路やうりずん南風^べ
 磯菜摘む空たつぷりと海の上
 鳥雲に入る時ひかり集めたり
 海を見に行く約束の春シヨール
 猫を抱く容に眠る朧かな



俳句を知り、季語を識り
 春が好きになった。出会
 いと別れ、淡い希望と心地良
 いゆるび、命の恵と深く静
 かな哀しみ。それらがな
 いまぜになつて心揺蕩う春。
 沖繩には、うりずん（旧
 二月～三月）という美しい
 季節の言葉がある。雨がち
 な日々の中に、とてつもな
 く輝く日が、沖繩はこの日
 のためにあると思えるよう
 な日がある。
 だから・・・もう少し
 頑張れる。

沼の春

岩崎 武士

小綬鶏の沼に人恋ふちよつとこい
蘆原に鳥待つバレンタインの日
鰯挿すや鷺早々と竿に立つ
鳥の背にひかりの粒や春の雨
菜の花の堤に画架を立つる人
春昼の猛禽の影沼乱る
春嵐沼散らかしてしまひけり
残る鴨さざ波のまま漂へり
鳥引くや水面に風のやさしき日
木道に佇み沼の春惜しむ



静岡市の郊外にある麻機遊水地（通称麻機沼）は、昭和49年（1974）の七夕豪雨以後、多目的遊水地として整備されている。この事業で開水面が増え、年間多くの野鳥が飛来する。

専門家によると、野鳥は一年に110種、現在までの累計で219種確認されている。さらに、蜻蛉56種、蝶52種と、生き物の宝庫であり、静岡県の代表的な探鳥地となっている。

私も「野鳥倶楽部」で沼を訪れ、鳥や自然を楽しんでいる。沼は春がよい。

仏生会 曾根 満

エッセイには、井川への途中の集落にある寺を訪ね歩いて、漸く仏生会を勤める寺に行き会うことが出来たとある。

村と村つなぐ茶畑の芽吹時

淡い緑色がふつくと膨らむ芽吹き時の茶畑が果てしなく続き、茶所ならこそその景色を彷彿させる一句。

降誕会 獣の翼のうつろなる

「生きとし生けるものはすべて生まれながらにして仏となる素質を持つ」という釈迦の根本的な仏教思想。作者が歩く山中には、獣を捕る翼が掛けられている。釈尊の誕生を奉讃する日であるのにと虚しさを覚えたという。

雪代の高鳴る寺を訪ひにけり

寒気が緩み山の雪解が盛んな時期、訪ねた寺の傍らに、ごうごうと流れる雪代川があり、漸く行き着いた寺に迎えられる感動が窺われる。

三人の媼の手なる花御堂

野や庭で摘み溜めた色とりどりの花で、媼たちが賑やかに花御堂を作っていく様子が見えるようだ。中山純子の《花御堂蜂はらひはらひ作りしよ》の作品が思い出される。

花祭果てり吊橋風の 中

花祭も果て、帰りの吊橋は風に吹かれ揺れている。少しスリルがあるが、仏生会に会え、心満たされた帰路である、軽々とした足取りで吊橋を渡る作者が見えるようだ。

阿佐谷 加賀 葉子

阿佐谷に住む作者。エッセイには「現在の阿佐谷をそのまま詠んだ」とある。

櫻道 鶯の冠羽に 冬 茜

緑の多い阿佐谷は銀杏並木、櫻並木が見事であるという。その大きな櫻に鶯が止まっている。冠羽が冬の茜に染まっている光景は絵になっていて美しい。川べりや水辺に生息する鳥が大会の真ん中で見られるのも珍しいのではないだろうか。葉が落ちた櫻並木、茜に染まる鶯の冠羽がポイント。

駐車場 気負ふ狸と出くはせり

ふいに人間と出くわした狸の「気負ふ」が面白い。人間も狸も驚いた様子が愉快な句。

ロータリーのメタセコイアや冬満月

駅前ロータリーのメタセコイアも葉を落とし冬樹となっている。時しも冬の満月が煌々と照らしている情景は、見慣れたものではあるが感動を覚える。

阿佐ヶ谷のホーム遥かに雪の富士

駅ホームに立つと遥か遠くに冠雪の富士が見えるという。

都心へのアクセスも抜群で、住みやすい街ランキングでも上位を占めると言われる阿佐谷である。なるほどと頷ける。

常の生活にある阿佐谷の街、そんな平凡な景を非凡な詩として昇華させるところに力量を感じた。



感動

沢木欣一

俳句実作に当たつての基本的なことをメモしておきたい。

俳句は原則として有季定型の詩である。このことは誰でも心得ているのであるが、形式的にだけ受けとられて実作者の内側にしつかり入っていないようである。というのは、詩的なものと詩的でないものとの区別をわれわれは案外おろそかにしているからである。

俳句はあくまでも詩の一分野であることを確認して、実作に当たるべきである。俳句が詩であるために有季定型という条件がどうしても必要なのである。

ところで、詩というものは感動がなければ生まれない。感動がないのに、いくら言葉を寄せ集めても詩にはならない。言葉を集めて詩になることが全くないともいえないが、これは例外で、一般には期待出来ない。俳句を作る場合、誰でもが心掛け、また苦しむのは詩因を見つけ出すことである。詩因すな

わち感動である。

感動といつても、それにはいろいろな種類のものがあることはいうまでもない。人間に感覚・感情がある以上、森羅万象あらゆる物と事に関して感動が起るわけである。

しかし、ここで注意すべきは感動の質についてである。われわれは新聞の記事を読んでも、テレビのもろもろの映像を見ても、また、日常の生活の実際から、喜怒哀楽の情を催すのであるが、一般的、常識的な感動からは詩は生まれることは少ないことを銘記すべきであらう。

たとえば、ある政治的事件について憤慨したり、また、孫が産まれて喜びこの上ないというような現実そのままのナマな感動は、すぐには詩にならない。現実そのままの感動と詩的感動は質が違い、次元を異にしていると考えた方がよい。

現実とは詩因の宝庫であるが、詩因は自分自身で探らねばならない。しかも、詩となる感動は主として美を中心としたものである。対象のなかにいかに美を自分で見つけ出すか、これが俳句では第一歩である。そして美的感動は訓練によって進歩するものである。

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊

俳句界

2022年

5月号

特集

俳人と仕事

○総論 俳人とバックグラウンド 青木亮人
○私の仕事

岡崎桜雲 細谷暁々 高橋健文
酒井湧水 五島エミ 矢作十志夫
稲田降子 木暮陶句郎 川嶋ぼんだ

○俳人という仕事 才野洋 龍野龍

特別作品21句

西村和子

タラシ 俳句界NOW 依田善朗

特集 美ら島・沖縄 沖縄の俳句

○論考 沖縄俳壇の歴史 野ざらし延男

○沖縄を詠んだ名句 鈴木光彰

○沖縄の季節から見える風土の魅力 上地安智

○沖縄を詠む 岸本マチ子 三浦加代子

前田貴美子 安里琉太

追悼・稲畑汀子「ホトトギス」名誉主宰

本セクション結社「山茶花」三村純也

私の一冊 山本一葉「笹」



対談 佐高信の甘口でコンニチハ！
川柳つくし (文芸春秋)

「俳句界」投稿欄

一流選者15名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性がございます。



株式会社文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖夏

※内容は変更になる場合があります。

人物特集

没後50年 三橋鷹女

▼総論 三橋鷹女とその偉業
▼論考 鷹女作品の特徴と現代的魅力
一九四〇年代の三橋鷹女

特集

取り合わせの距離感
即かず離れずのコツ

▼総論 エッセイ
▼実作指南 絶妙な距離感のコツ ほか
坪内稔典

特別座談会

季語の冒険者たち

宮坂静生／井上弘美／山田佳乃／
堀切克洋／神野紗希(司会)

俳句

5月号
予告

4月25日発売
予価1,040円(本体945円)※

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

『梁塵秘抄』と遊女

内海良太

「梁塵秘抄」の第2回です。今回は後白河院が「今様」の編纂にどのような人達と関わったのかを見てみます。

後白河院は今様を後世に伝えたいという執念がありました。口伝でこう書いています。

「大方詩を作り、和歌をよみ、手を書くともがらは書きとめつれば、末の世迄も朽つる事なし。こゝろわざの悲しき事は、我身かくれぬる後とどまる事のなき也。」

和歌や書は書き留められて後世に残るが、歌や歌い方の技巧などは後世には伝わらない。だから自分が書き留めておきたいといっています。

後白河院の今様の収集は貴賤上下には関係ありませんでした。今様の上手と聞けば誰でも宮中に招き入れ、目の前で歌わせ、一緒に歌い、歌を書き留めました。

傀儡や白拍子、遊女らを神崎や江口から呼び寄せています。神崎は淀川河口の遊郭、江口はご存知の淀川右岸の遊郭です。西行と江口の君との歌問答はよく知るところです。

武家にも今様の名手がありました。源資時みなもろすけときです。美男で美声の持ち主です。宮中での謡曲うたいきょくを担当していた家柄に生まれました。母親が遊女と伝わっています。後白河院の信頼

も厚く将来今様の仕事を継ぐのは源資時だと囑望されていました。

源資時は木曾義仲が都に乱入したとき、後白河院と一緒に京を脱し鞍馬から比叡山に逃げ込んだとの話があります。

後白河院が先生と仰いだのは、青墓出身の遊女です。

青墓は現在の岐阜県大垣市青墓町で美濃國分寺跡の近くで、平安時代には、東山道の宿場があったところです。

当時の宿場には遊女が大勢いて賑わい、今様の名人上手が綺羅星のように輝き、まさに不夜城をなしていました。

青墓の遊女乙前は今様の名人中の名人でした。後年、乙前が鴨川の五条河原で隠遁生活を送っていたところ、話を聞いた後白河院に、ぜひ先生にと請われ、84歳で亡くなるまで、今様のいろいろを後白河院に伝授しています。

後白河院の乙前に対する態度は優しく細やかでした。乙前が死の床に伏したとき、お忍びで見舞いに出掛け、乙前に「歌を聞かせて」とせがまれると、今様を歌って慰めたそうです。乙前の亡くなった時には追悼文を寄せています。

現在の大垣市青墓町には平安時代創建の円興寺があり、「今様発祥の地」の石碑に、次の今様が彫られています。

遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん
遊ぶ子供の声聞けば 我が身さへこそ動うごかるれ

同人作品評（四月号）

大林彬彦

冬日向祖父の碁盤の目の薄れ 北浦詩子

祖父を偲ぶ詩と思う。愛情を注がれた一駒一駒を思い出し懐しんでいる。碁を好み、碁敵と打ち合ったり熟考したりする姿が思い出される。冬日向の中に置かれた碁盤は古びたが祖父への思いは益々募る。

父と子の会話弾んである柚子湯 宮本加津代

微笑ましい好い場面だ。普段はほんの二言三言だが風呂で父（＝作者の夫）と子の会話が弾んでいる。それを聞いて作者は嬉しかったのだ。心身の平和と安らぎがある。そうしたことも柚子湯の賜物だろう。

ぼろ市に値切りて買へりばらの苗 赤松郁代

中七の「値切りて買へり」が味噌で作者の得意な所だろう。ぼろ市で値切る。是には少しく勇気が要る。ちよつと気に入ったものを見つけた作者は、「これ〇〇円にならない？」といったやり取りをして成功を収める。

不器用に結ぶネクタイ成人式 草間三香子

パリッと決めた新成人の風姿にぎこちなく結ばれたネクタイが何とも頼りなく人間臭いのだ。「大丈夫かしらこの人達、しっかり頼みますよ、今後の日本を！」の激励と期待が籠められているようだ。

使はれぬ非常階段残る雪 桑原優美子

雪はしんと降り積もった。何事もなく階段には積雪が溶け残っている。使わないで済んだ静かな非常階段。そこに平穏でよかったわ、という作者の気もちが反映されている。

縁側に日の回り来し福寿草 西本才子

家族的に何株か固まって咲く福寿草。そこに日が当たると待つ。と、いよいよ日が回って来て燦々と黄の花々が輝いたというのだ。金色の景色が心温まる感じ。名もめでたく花の光もやさしく愛される花。

金と書く今年の漢字年の暮 川越昭子

清水寺の年末の一字で世相を表わす行事、二〇二一年は「金」であった。日本で行われたオリンピックの金メダルに因んだ金。それが背景の一句だ。選手達の練習苦と金メダルを得た歓喜とが偲ばれる記念碑的な詩となった。

やつれたる受験子の手へお年玉 山崎郁子

初句の「やつれたる」に受験子の苦闘する姿が表われている。オーバーペース気味の猛勉強によって受験子はやつれを見

せているのだ。顔にも肌つやにも元気がない。同情した作者は少し多目にお年玉を与えただろう。喜ぶ受験子の一瞬の笑顔を彷彿させる。と同時に合格の喜びの表情も浮かぶ。

寅の年迎ふ健やかに穏やかに 田賀 榎 恵

新年を迎えた喜びをストレートに詠んだ一句。形容動詞の二連発のリズムがうれしい。心の健康と体の健康。家族の平穏と世の中の平穏。得難い仕合わせだが、それゆえ、折りも込められた表現でもあるだろう。唱えよう、「健やかに穏やかに」と。

綴帳を閉づることくに冬落暉 山口千代子

それまでの花やかな舞台の賑わいを一切合切閉じてしまう綴帳の仮借なさ。それと同じように昼間の明るい生命の営み等をすっと落ちて消してしまふ冬の落日。情け容赦は微塵もない。後は寒く暗い夜の長い闇のみ。直喩が効果的。

お正月写真の夫にまつ一献 新妻 奎 子

天と地との夫婦愛の交歓がきらりと光る詩だ。新妻さんの献げる酒を夫は歓喜の笑顔で受けるであろう。こう詠まれた愛は永遠に消えない。死でさえ切り裂けない愛がここにある。

探梅や土堀長々御用邸 恒川 清 爾

寒さや風雨を除けば探梅の頃はいいものである。紅梅も白梅もそれぞれに好い。それらを探するのが楽しみ。ところが御

用邸の土堀は長すぎてなかなか梅を見せてもらえない。ルナールの「蛇長すぎる」ではないが、土堀長すぎと、つい一言言いたくもなろうというもの。別に他意はないであろう。

追はれきて羚羊の子の庭に立つ 大村 峰 子

野生の動物達が人里へ出てくることが多くなり、駆除が行われる例が跡を絶たない。開発過剰など皆我々人間の仕業であり、その環境問題の一端がこの句にはある。初句が切迫した羚羊の子の状況を訴えている。庭で羚羊の子は暫し休み又どこかへ行ったのであろう。願わくは自分達の山へ帰れます様に。日本固有種の羚羊は特別天然記念物。

銃担ぎ揃ひのベスト獵夫かな 宮崎 知 恵 美

パリッと狩の出で立ちを決めた獵夫たち。揃いのベストを着て。「うわあ、決まってるなあ」と私も驚いた経験がある。周囲を圧する様な凛々しさでその人達だけがカーンと澄む。隙のない美しい端正な装いの晴れがましさ。同時発表の作者の句に「出番待つ獵犬鼻息荒きかな」があつて物語性を楽しめる。獵夫の静に対して獵犬の動の姿の妙。

菩提寺の無住のままに山眠る 長 島 操

住職さんのいないお寺が増えているようだ。わが故郷の寺もそうだし全国的な現象なのか。人口減少とも関係しているよう。お坊さん達も大変なようだ。檀家の減少。今日的な問題を提起している一句。「山眠る」が効いている。



輪島塗のお弁当箱

金沢 北野陽子

我が家には、今も色鮮やかな輪島塗のお弁当箱と、少し大きめの箸箱があります。それは七十五歳で亡くなった夫の父親が県庁に勤めていた頃毎日持って行ったものです。布で磨けば磨く程艶が出て、描かれている花や紅葉が浮き出てきて絵を見ているようです。

私の子供の頃は食器などは水洗いが普通でしたから、こすらないでさっと洗い、すぐに拭くようにと祖母に言われていました。九谷焼の食器が多く使われていて、お弁当箱も大事に扱われていたその頃の生活が思い出されます。たっぷりのご飯に手作りの梅干、おかずは加賀野菜煮。家族九人分の食事

に、お弁当は七人分。手渡す時の母は本当に嬉しそうだったと夫は言います。夫の父親の使い込んだ輪島塗のお弁当箱は我が家の家宝です。

大きなお弁当箱

横浜 大駒泰子

今どきのお弁当箱はどんな箱なのでしょう。保温性があり汁物も可能とできますが、三十数年前までは毎朝早く起きてはお弁当を作っていました。娘二人は大きいお弁当箱を嫌がり、小ぶりな物にぎゅうぎゅう詰めしました。お菜の中にデザート替わりの定番がありました。さつま芋を潰してバター、砂糖、ミルクを少々加え、アルミのカップに入れトースターで焦げ目をつけたもの。娘達は覚えていたのかしら？息子は学食があったのでお金を渡してこと足りました。

夫の好きな食べ物、揚げたての牡蛎フライ、嫌いな食べ物は冷めた牡蛎フライ。お弁当は作らずに済みました。

わが家には大きなお弁当箱は必要なかったようです。

パンダの弁当箱

静岡 藤本節子

一九七二年、上野動物園に中国からパンダがやって来た。「カンカン」「ランラン」と命名され一躍パンダブームとなった。

その頃生まれた娘はパンダが大好きだった。幼稚園に入りお弁当を持って行くことになり、かわいいパンダのイラスト入りの弁当箱を買った。お弁当は、色合いよく娘の好みの食材と味を考え満足してもらえよう、毎日楽しみながら作った頃が懐かしく思い出される。

卒園後はお弁当を作る機会もなく、キャラメルやゼリーを作る時の流し箱として、この弁当箱の手頃な大きさが気に入り、度々利用し重宝した記憶がある。

四十数年前の娘の弁当箱は、昭和レトロとなった今もなお、パンダと共に色褪せることなく我が家の食器戸棚に残っている。

日曜日の夕飯

佐倉 杉田富美代

金曜日の夜、わが家に帰って来るのは末の娘。一人暮らしを始めてからのペースは変わらない。仕事柄、洗濯物をどっさりを持ち帰る。

日曜日は、翌日の勤務と朝の出発時間を確認する。それから弁当のおかずを考え、夕飯の料理が決まる。わが家には、この娘の弁当箱が様々ある。大小のタッパーやスプーンの容器など、職場のレンジで温められるので、昔のような冷たい弁当の心配はない。昼食が楽しみの時間、これは昔と同じようだ。早番の勤務の時は前日の夕飯の食卓に弁当箱を並べて、そこに詰めている。彩りを考えながら。

いつまで続けるのか、早く結婚してくれることを祈るばかり。

弁当箱

静岡 荻野加爾子

小学校一年生だけ給食のある公立に

通った。とにかく少食で好き嫌いの激しい子供だったから、二年生で引越して、歩いて五分の弁当持参の私立へ姉と共に転校した時は、不安より嬉しかった記憶がある。

その頃スコッチエッグ(母はフーカデーンと言っていた)や肉そぼろと炒り卵海苔巻等何とか私に食べてほしいと母は工夫してくれた。今思えば感謝感謝である。さて弁当箱は薔薇の花の絵の赤いアルマイト製で、六年生まで使っていたさすがに四年生からは、もう一つおかず入れを追加したが。当時、我が校では冬になると弁当温め機なるものが登場した。朝、弁当を入れておくと昼は温かいと言う画期的? なものだった(故にアルマイトが最適)。今も赤い薔薇の絵の弁当箱を鮮明に覚えている。

田植の日は重箱弁当

市川 奥澤よし江

母の実家に親戚が集まり田植に精を出す日、お昼になると大伯母が重箱弁当を田まで届けてくれた。莫塵に風呂

敷を解きお重を広げる。塩むすび、刺身こんにゃく、わらびのお浸し、蕎麦、鶏肉と野菜の煮しめ、天ぷら、沢庵、そして芋羊羹。大伯母の心づくしが詰められている。足を伸ばし谷津田の風に吹かれ四方山話に花を咲かせながらこの上ないお重をつまむ。田植の上手下手なども面白おかしく言い合っているうちにお腹は満たされてくる。風になびく田の早苗を見ながら一斉に腰を上げ残りの作業に取り掛かる。

丹念に扱ってきたであろう年代物の漆塗りの重箱とそれを囲む人と時間の流れは、小川に現れる生き物に目を輝かせ、谷津田が大いなる森に思えた幼い頃の大切な記憶である。

「万象ノオト」投稿募集

▽10月号「カレライス」(6月末日締切)

▽11月号「路地」(7月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（五月号）プロフィール



おかだ
岡田あゆみ
(小松島)

して、平成25年には「なると」同人となり、「なると賞」「なると新人賞」「なると年度賞」にも選ばれた。

平成31年には「徳島俳壇賞」を受賞している。

ライオンの呟いてある寒さかな
「万象」への投句は、平成28年9月号の三句欄から始まり、「万象作品の佳句」にもたびたび取り上げられている。

蟬しぐれ母は時空を漂へり
飛高隆夫先生は、この句について「時間の意識、空間の意識が曖昧になっている母。気持ちをしずめて、そのような母を見つめている」と評している。

「万象」入会後は、毎年四句欄に選ばれて、素直な写生眼と阿波の風土に根づいたモチーフは、小林愛子先生の眼に留まり、次のような評を頂いてい

る。

戦争を知りしひひなの幼顔
「戦争を知りし」とは戦前もしくは戦中に生まれた雛人形であろう。母上から譲り受けたものか、戦争の話がひひなを通して語り継がれているのは感慨深い」

あゆみさんの昨年の活躍は目ざましく、四句欄には、6月号、7月号、11月号、12月号と選ばれ、次の作品で見事、令和4年5月号の巻頭に輝いた。

福耳の人と並んで初詣
鯨鯨の得体の知れぬ部位旨し
切幣が海へ飛び散るとどこかな
円墳の祠に献る鏡餅

阿波の女性はいっしょに多いという。あゆみさんもその通りで、明るく優しいお人柄である。現在はご夫君との二人暮らしだが、孫さんとのリモート会話を楽しみにしている。動物が好きで、動物園のボランティア、バードウォッチングなど趣味も広く、常に前向きに生きておられる。

(福島せいぎ)

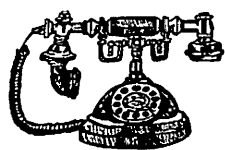
岡田あゆみさんは、昭和27年徳島県吉野川市生まれ。徳島大学養護教諭養成所を卒業後、35年間養護教諭として勤めた。当時、徳島県では僻地での単身赴任が義務化されていて、あゆみさんも山間や海辺の小・中学校で6年間勤めたが、後に、その時の体験が俳句作りに役立ったという。

あゆみさんの俳句入門は、平成21年に「なると」の女性だけの句会に誘われたことに始まる。

初時雨牛の一声くぐもれり
「なると」に入会後は、熱心に投句

万象作品

江見悦子選



春浅し肌につめたき化粧水
福岡 宮田千恵子

春きざす金平糖の量り売り

農小屋の釘ぐいと抜き春迎ふ

口笛のやさしき男春田打つ
佐野 店網洋子

春の川きらめく中に鷺佇ちて

淡雪や雲つぎつぎと東へ

三極の蕾しろがね鶴の声

中天に淡き昼月初音かな
静岡 内藤允昭

虹架けて海へ放水出初式

寒月や山門を拭く修行僧

ウインチの錆びしケーブル山笑ふ

涅槃図や地に伏して泣く青年僧
横浜 三木豊子

桐箱の文字の薄れし内裏雛

湯を出でて沈丁の香を深く吸ふ

白木蓮一片ほどけ雨兆す

その下に乳母車寄せ梅ま白
甲府 江口嘉郎

鳥雲に八ヶ岳を遠くに迂回して

雪解田に下ろす鉄音やはらかし

亡き母の竹尺横に針供養

白鷺の抜き足ゆるり水温む

雪匂ふ朝の窓辺の明るさに 金沢 白村喜久代

大正昭和遠くなりたり建国祭

ボツボツと爪を切る音春隣

雪解の暗渠を走る水の音

枝垂梅鈴鹿の山に抱かるる 敦賀 山本一枝

能面のすこしほゑむ寒の明

水仙におのが姿を正しけり

立山のいたどり折りて杖となす

竹籠に野の花あふれ利休の忌 焼津 小梁洋子

菜の花忌土手の小流れうたふやう

ゲルニカの馬は目を剥き亀鳴けり

大岩に噛みつく波や多喜二の忌

啓蟄やブラシでこする松の幹 日野 渡辺八枝子

立読みの腕にずつしり春大根

しやばん玉吹けば大きな日をこぼつ

晴れわたる松の高みをさへづれり

長靴のざくざく進む雪解道 札幌 石田 睦

鯨群来白く濁れる北の海

春憂ふ父の背中の小さくて

流水の底に育つ藻ありにけり 佐々木 茂

緋寒桜那覇の昆布座趾訪ひぬ

春宵の昆布談義や古酒酌みつ

雛飾り老舗酒屋の土間の奥 札幌 島崎 洋

ビル街の夜間中学春灯し

春隣ショーウィンドーの赤い靴

軒先に棒鰯ゆるる山の宿 園田 鶴子

鳶職の足場に消ゆる春の雪

水温む動き出したる鯉のひれ

錫杖をふるや春光こぼしつ 高山 誓英

棒鰯の極まる凍れ打てば鳴る

天塩川万の水塊疾走す

護摩壇より残る寒さの伝はり来 高山 誓英

春陰や膝の疼きが唐突に

はればれとものの芽を見し眼を返す

いつせいに木々揺れ雪を放ちたり 竹重 富子

さかあがり初めてできて雛の日

雪どけの遊びうれしき水たまり

沢風や樹林より雪立ち上る 谷 廣司

淡雪や百の寄生木息深き

白樺にひかりの遊ぶ春夕焼

ふる里の山には未だなごり雪札幌 船橋明美

雪解風 目標高く新天地

窓ごしのまばゆき日差し春来る

多喜二忌や地獄坂てふ急な坂

オレンジに沈む夕陽や斜里流水

陽光のぬくもり増せり花ミモザ

薄日差す庭石の影雪間草江別 太田佳美

道産子に頼寄する翁牧開き

春近し檜葉に雀の声高し

大窓へ揺るる木の影百千鳥新潟 齋藤 信

春めくやはぐれ鴉の声高き

啓蟄や草木の匂ひ変りたる

夜明の庭木々へさりと春の雪

日和浜の潮の匂ひや春の雪

バスを待つ背の強風春一番

啓蟄やどれも動かぬ大鴉

春炬燵出船の銅鑼を聞きながら

本棚に倒れてばかり紙雛

明けやらぬ空をちこちに寒鴉

病院のベンチの二人深雪晴

佐藤幸示

榊原キヨ子

斎藤ヨシ

出勤の靴に昨夜の追雛豆

水温むゆつくりと菜を洗ひぬし新潟 佐藤シズエ

軒に吊る八目の乾ぶ二月尽

別れ雪料亭曲る蛇の目傘

引鴨の岸に窪みを残しけり燕 渡辺志ま

花殻をつけたるままの四葩に芽

目つむりて尺八さらふ春燈下芳賀 稲川清子

節分の豆を啄む番鳩

昨夜の雨あがり畦塗るトラクター

種芋を穴より掘るや老農夫 福武幸子

米糠で磨く柱や雛の間

木洩れ日に紅を深むる藪椿

春嵐ひねもす木々の鳴りやまず 鹿沼 渡辺利子

春立つや振り返りつつ猫逃ぐる

尾長来て食べ尽くされし実南天

玄関の蠟梅の香に迎へられ 渡辺利子

雛飾る幼の笑まふメールかな

梅満ちて甘き香りや朝の庭

葉隠れに赤の極まる八重椿

遊水地遠男体山の薄霞栃木 飯塚キミ

木蓮の蒼はなべて日をとどむ

砥部焼の掌にのるほどの雛かな

初生りの豌豆夫へ供へけり

佐野

木村君子

鯰大根ゆつくり煮上ぐ春夕べ

雑誌読むフードコートに春一番

春満月庭に木の影くつきりと

牡丹雪ヘッドライトにきらめきぬ

ちらし寿司供へてよりの雛納

たんぽぽの張り付いてゐる畦の道

仏の座畑一面に咲きゐたり

満作や朝日を受けて色増せる

薔薇園の剪定の枝ぶつきらぼう

小流れの僅かな湿り座禪草

遠筑波青麦ひかる一本道

山峡に雉の一声昼下り

畦川のほとり青める菖蒲の芽

蒼天や穂の芽吹きの手りたる

正造旧居の板木打つ音春めけり

読み耽る深夜しんしん春の雪

登り来て遠く地平は海市めく

黒川しげ子

齋藤ミチ子

関口かつ子

仲山さよ子

菰原美穂子

倒木のこんなところに落の莖

佐野

義本美智江

空まさを崩れし堀に犬ふぐり

末黒野を鳶の大きく旋回す

突然の恩師の訃報春寒し

つくば

藤原善明

分水嶺軽く越えゆく胡蝶かな

北窓を開けて筑波山の風通す

白きものまとひ紅ます寒紅梅

志木

汐見克彦

結晶のさまそれぞれや雪の窓

揺らぎつつ風船一つ青空へ

舫ひ舟ときをり突く薄氷

森山洋之助

大雪の里を氣遣ふ能登杜氏

春なかば水琴窟の闇響く

雛祭母も女の子にもどり

和光

板垣陽子

三月の一日ゆつくり過ぎてゆく

シクラメン少女のごとく向き合うて

ふだん着で通ふりハビリ桃の花

新座

多田英治

東風吹けば記念句集の話など

にこやかな七福神に雛の酒

春光や少女の笑みの逆上がり

川越

岡野輝子

初蝶来古民家の土間くぼみたる

春浅し葱に声かけ土を寄せ
曇り空野火の匂ひの畦歩く 川越 常見イツ子

沈丁や母の教へを思ひたる
春風や背筋伸ばして輕装に

涅槃寺上がり框の高かりき 千葉 大月玲子

春の雲昼はゆるびてゐたりけり

三月や三陸福島ウクライナ

ひな祭百寿の母の早春賦 喜多恭仁子

啓蟄や講座に学ぶ歎異抄

梅活くる梅の絵柄の柿右衛門

島と島繋ぐ大橋 春の月 高田みや子

入院の面会人の春シヨール

剪定夫鉢迷ひのなかりけり

余寒かな玉眼透くる閻魔王 酒々井 小林あけみ

開発の迫る棄て田へ東風荒し

夕闇の巢組みの声の静まりぬ

象の眼のごと深々と雛の眼 佐倉 新谷八郎

長屋門に女医の自転車梅ひらく

夢に出る白紙答案梅真白

三月やとをかじふいち祈りの日 佐倉 有泉正夫

春昼の豆腐は水に動かざり
摘草やいつしか牛に歩み寄り

しづかなる闇夜となりて春の雪 佐倉 杉田富美代

鉢植えを日溜りに寄せ寒の内

雛菊や庭の華やぎ一身に

雪像の肩が落ちゆく日暮かな

土を打つ鋏の手ごたへ春隣

藪椿慈顔におはす磨崖仏

コピー機のいつたりきたり寒戻る

吊革の揺れて発車や春立つ日

傷口のかさぶた取れぬ余寒かな

箱を出て疊に憩ふ雛かな

烏骨鶏と餌を啄む雀の子

道端の草に土筆の五六本

春暁やセーラー服の一年生

山菜の生命力やうららけし

春昼の山菜づくしや城下町

母の手を振り切つてより寒稽古 船橋 入河 大

悔いなしと逝きたる兄や雁帰る

お地蔵にがんじがらめのマスクかな

残雪に日矢の届けり空真青 船橋 槐島 修

通学路両側に雪置かれあり

庭の梅日にけに蕾膨らめり

春の空淡き色して雲流る

川岸に一本開く花菜かな

川の土手桜の花の満開に

雪の果浅間山莊五十年

森消えて鶯笛を買ひにけり

さまざまな人の景色の桜かな

這ふやうに母の摘みゆく露の蓋 柏

浅春や風まがりゆく利根堤

教習所の道を雉子の横切れり

待春や玻璃に目をやること多き

疫病の鬼に豆撒く闇へ撒く

散葉のさらりと喉へ春立つ日

水温む薬屋の猫寝てばかり 松戸

白猫を肩に漢や春夕焼

春の夢机並べし友であり

神木の幣を巻き込む春一番

バッテリーの快音響き下萌ゆる

鹿毛満子

山口秀吉

近藤澄子

石川幸子

菊岡緋路

黒米を混ぜ炊く日和雛の日

雛納代々古き箱の中 松戸

罅割れの土より咲けり鼓草

マンシヨンの谷間の春田打ちるたり

立春の朝日きらめく梢かな

路地の奥稲荷神社の梅ふふむ

早咲きの花の揺るるは目白かな

白雲の大亀と成り春うらら 市川

春北風音信絶えし友の顔

コバルトの水平線や春の風

春兆す骨董品の燻し銀 東京

無造作に竹の子包む古新聞

英字紙にくると束ね花ミモザ

春一番スカーフひらりねぢれけり

冬夕焼遠き山なみ茜色

白鳥の気品あふるる隅田川

都鳥柳橋なる船泊り

菜の花忌坂東武者の八幡宮

風やさし葉陰に揺るるシクラメン

古戦場跡は原つば下萌ゆる

渡部洋子

安藤美酒々

石井登女

石山風童

北口富栄

薄氷の甕に何やら動くもの
大寺の奥なる墓所に初音かな
マフラーに顔半分の会釈かな
ひと部屋の暮らしガラスの内裏難
挨拶の声ひと言の余寒かな
春寒し金の成る木のみな溶けて
鳩追つて幼子路地に桜草
あぢさゐの芽吹き鮮やか空青し
コロナ禍や春宵一人落語聴く
童顔の五人囃子の烏帽子ずれ
半世紀飾りし雛吾子のごと
春浅し姉を見送る七七忌
東風吹くや杜に長き婚の列
固まつて日に輝けり福寿草
雨あがりまことに白き白木蓮
外堀のジョギングの道柳の芽
児童らのトランペットの卒業歌
届きたる梅の香りや風そよぐ
紅と白梅の蕾の匂やかに
とりどりの緑眩しき今朝の杜

東京 高野翠子

田崎京子

鶴田智美

戸川節子

中澤桃子

西村サカエ

遠富士を眼下にしつつ揚雲雀
鉢物をまさぐりをれば名草の芽
その下へ釣り糸投ぐる薄氷
玄関に鎮座す小さき内裏難
休園の庭に俯く黄水仙
早咲きの桜の一枝日を求め
ドアノブにミモザ一枝閉店す
犬を抱き国境を越ゆ春の雪
浅春の北極海に細き月
ねぢれたるままのコートのベルトかな
春耕や土くろぐろとふくふくと
池の端に糸垂るる人朝ぬくし
早春の磯打つ波の泡やはし
湧水の水車の飛沫春めけり
恋猫の闇を裂く声後の黙
春一番明けたる朝の白き月
雨宿り一つ落ちたる紅椿
春なれや半月高く仰ぎ見る
春の朝富士の上なる白き月
シクラメンの鉢動かしぬ日を追うて

東京 長谷川信也

長谷川はるみ

平子甲奈

本多 葵

松本幸男

宮崎正義

三 郎 南場雅子

頬赤き雉の子畠をゆるゆると

あたたかし飴色の月かたぶけり

府中

竹村晃子

たをやかに芽吹く柳や風一陣

濃く淡く子の手から消えしやばん玉

冬ごもり折紙人形できあがる

国分寺

中ノあさ子

飯宮のしめ縄濡らす夕時雨

初春の宮に詣でてみくじ引く

春光の断崖に立つマリア像

日野

松原悦子

白鷺の散る川筋や風光る

風船の紐小さき手をふと放れ

冬桜鳥居の脇の明かりかな

横浜

阿部トキ

山葵田の小石冬日に乾きたる

山並を茜に染めて日脚伸ぶ

早春の木立に響くノック音

浮寝鳥かたまりのまま波に乗る

緋鳥鴨番の水尾の一条に

初蝶の明るき黄色眩しめり

納屋の隅嫁ぎたる子の古雛

枝の先梅の蕾の薄くれなる

雛しまふ今年も倉の奥の棚

岡 元枝

岡田幸吉

三月の野面をわたる風青し

青き踏む己が足跡一筋に

藤の枝に和毛揺れる余寒かな

横浜

加藤和子

二歳児のムーミンマスク春立てり

雪警報仰ぐ夜空の春の星

ウクライナのニュースや庭に落の聲

坂本具子

円覚寺僧堂深く梅香る

尼寺の仏に供ふ紅椿

毘沙門天女貞の実びつしりと

柴田雅春

傾ぎたる左千夫の墓や寒の内

極月や門扉の外を掃く仕事

連翹の暴れ枝結ふ風の中

鈴木律子

逆しまに鶴の啄む寒桜

真顔なる子の早発ちす大試験

二ヶ月の光冷たき庭に佇つ

富田 要

裏庭に二畝青む三月菜

街道に残れる桑を解きにけり

初氷踏みしだき行く登校児

長野高朋

初風呂や小唄一節湯気の中

冬晴れて煙一筋墓地の空

後ろ手の婆寒卵掌に一つ 横浜 豊 美佐子

物干棹小さき氷柱の横並び

川崎 横山ユキ子

仏壇の梅一輪の香りけり

本流となりて揉み合ふ雪解川

川崎 横山ユキ子

太陽をひとり占めして花菜畑

園児らの声囀に負けてゐず 茅ヶ崎 久保田富士子

春昼やパン焼くにほひ何処より

丹沢の山幾重にも春霞

春日さす障子に鳥のシルエツト 大和 中谷由郁

福は内明るき声の響く路地

祝ひ膳桃色あふれ雛の間

手毬麩をお椀に浮べ雛の家 伊勢原 山本カツ子

冬木の芽引き寄する手に雨の粒

立春のバケツに水のあふれけり

柳の芽ゆるりと色のほどけたる 松田 古谷悠紀子

丹沢に馬の雪形鍬を振る

空耳か初音か峡の空青く

樹木葬選びし友や梅ま白 松本 藤森利子

梅の花里の湧井に手をすすぐ

松本 藤森利子

梓川里の桜の満開に

春隣検診結果待ちをれば 静岡 伊東文恵

書棚より三冊を抜き春炬燵

春光や富士を背に置き大井川

母の手をしつかり繋ぎ梅の寺 大石弘子

黄楊の花旅に買ひたる於六櫛

夜桜や肩に花びら乗せしまま

野仏に梅一輪の日の和み 杉澤 修

涅槃図に赤毛の猫の紛れをり

日を仰ぐ童地藏や松の芯

しだれ梅透かすや海の真つ平ら 杉山紀美子

ひこばえや今日は休みの小学校

山路来て社の前の露の蓋 高橋 一夫

をちこちに手締めのひびく達磨市

山の端にかかる昼月蘆の角

初桜石段千の登り口

初桜鴉の声の谷深し 田中秀幸

囀や線路の分かつ隣組

杉花粉飛ぶや売家の札一つ

囀や寺の寮舎に身長計 永田公香

涅槃図の象の一つになみだあり

春筍の膳囲む夫誕生日

くちびるに春の時雨の一雫

海へ吹く群青色のしやぼん玉

臘月鉄の香残し列車過ぐ

赤と黄のチューリップ挿す仏の間

春の鳥前を横切る真昼かな

冴返る案内板の字の失せて

冬の田へ赤石岳の風ますぐ

回廊を僧二人行く余寒かな

旧正や薬師地藏に小豆餅

梅ほつほつ日の翳りゆく山の寺

水仙の群れ咲き大地鎮めけり

にやんこふたつ居ると幼の声ぬくし

初雲雀空青々と遠きかな

春の雪諸手をこぼれ消えにけり

立春の屋根の下には小さき灯

永き日や湧きたるをみな笑ひ声

カーテンの隙間しらじら雪明り

窓の並木もうすぐ桜てふ女将

藤岡

長谷川秀子

矢野喜久江

川俣幸

鈴木裕一

津

瀬野喜代子

金沢

北野陽子

新出祐子

裸木に日の燦燦とさしてをり

下着干す妻の鼻唄水仙花

一人居の早き夕餉や雛の間

裸木の瘤に何時もの番鳥

箔の店金の駿馬に冴返る

春の雪俱利迦羅過ぎて光さす

地虫出づ榕樹の根の押し合へり

玄関の長靴短靴四温かな

紅絹に残る疵の縫ひ目や春深む

起き抜けにコップ一杯寒の水

響き渡る遠く近くに除夜の鐘

吹き下ろす雪にまみるる鐘撞堂

縄の大蛇運ぶかけ声春を告ぐ

影絵なす百樹の上の春の月

震災に遭ひし布裁ち吊し雛

車輛降ろすクレーン春の波止場かな

宍道湖の蜆大粒枰あふれ

桜餅食めばさくら葉かをりたり

白鳥のひととき群るる呂知漚

リモートの子らの教室スイートピー

金沢

高木艶子

田上ナツ子

道場啓子

廣田宏美

松田好子

宮崎恵美

白山

朝倉みゆき

寒明や枝の雀の賑やかに
外灯の点りてゐたり春霞

白山

鶴尾正江

冬草を踏み小走りにバス停へ

小松島

岡田あゆみ

早朝の厨の窓や春立ちぬ

門前の佗助薄き日を集め

敦賀

川口和代

鳩の声遠くに野焼始まりぬ

春浅し尾瀬沼に雨うちけぶる

為永香月枝

厄落す宮居に拾ふ発句一句

戌の日の安産祈願春動く

中村 優

野仏に童女の匂ひ風車

よどみたる曲水に蘆の角ひとつ

斑雪 豆盆栽の曲り松

春動く赤き鹿の子の割れしのお

徳島

林 早苗

雪積みて燥ぐ子の声風の声

庭先に芽吹ける枝や八十路過ぐ

ワクチンを待つ間の余白寒の入

老犬の足よろよると寒明くる

山本晴美

平日の遊具のさみし桃の花

山本瑤子

早春や一足早く栄転し

裸木の狭間に落つる夕日かな

冬眠の蛙起こせる鉄の先

目が合へば雛の笑ふ雛の里

小松島

岡田あゆみ

はらからと見せ合ふ写真春炬燵

残り鴨風の意のまま流れをり

母ありてこそその古里梅真白

恐竜の化石掘るおと木の芽晴

少しづつ買ふ待春の灯油かな

ドラマ可否戦火のニュース牙返る

浮き上がる檸檬ひとひら余寒かな

福岡

相本和子

スーパールの壁に下がりし種袋

信号の赤のかすかや雪催

北窓を開くにはかに鳥の声

春風や子の声高き野球場

つちふるや夕暮の空ミルク色

日だまりに母へ毛糸の帽子編む

金盞花植ゑ亡き母を語る父

力みつつ初めて立つ子雛の夜

春の雪かぶりてまろき植木鉢

ウイルスと戦火のニュース春寒し

那珂川

高山ひさ子

山本瑤子

勤行の大音声や春夕焼 長崎 下見直哉

春の朝月へ向かひて深呼吸

紅梅の石塀越ゆる武家屋敷

ほんぼりに雛人形のゑくぼかな

竹藪を照らしてゐたり藪椿

病窓へ白梅の香の届かざる

網小屋の戸の鳴り止まず春疾風 西海 山下敦子

春潮や膨れ泡立ちむらを過ぐ

初蝶の黄色が二匹空の庭

永田美知子

お詫びと訂正

5月号の「同人作品評」(p42~p43)の文中
次のお二人の方のお名前に誤記がありました。

松浦陵保様 須賀允子様

深くお詫びして訂正致します。

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回
八木幹夫

第16回【泉鏡花の蛭】

金沢で弁当を買い込んで帰路についた。新幹線内で女に出会った。物語の山道を踏み分けていくと無数の蛭に襲われた。谷あいの宿にようやく辿り着くと女が川原に降りて痒みの走る背中を冷水で洗ってくれた。

列車がトンネルに入った。これは旅の僧侶(聖)の話だが、話を車内にもどすと闇の窓には女の顔が映らない。初夏、山菜のミズを採りに蛭ヶ岳に行った。案内の老婆が一年程前に茸採りに出た連れ合いが戻って来なかったという。「それは大変なことでしたね」「ほんとにそう思うとりますか」ぞつとしてふり向くと姿がない。

朴の葉がガサガサ落ちてきて何やら黒いひかるものが地面を這っている。人の匂いに反応した蛭だ。

肩凝り治療をする祖母の姿を思い出した。悪血を吸って丸々と膨らんだ蛭に線香の火をあてると、ころつと肩から畳に落ちる。無理にひき剥がすと食い込んだ蛭の口が残り、化膿する。血を清める女と川べりで永遠に微睡んでいたいと思った瞬間、宇都宮を過ぎ列車は東京駅へと向かっていた。鏡花の「高野聖」読了。弁当の山菜は食べ残したままだった。

最近の

座談会

—— 司会：筑紫磐井

名句集を探る

大西 朋
しなだしん
西山ゆりこ

星野椿句集『遙か』
星野恒彦句集『月日星』
茅根知子句集『赤い金魚』

◆巻頭三句

永島靖子／鈴木貞雄

大橋 暁／降旗牛朗

鈴鹿呂仁／小川晴子

◆俳句と短歌の10作題歌

小林貴子

松村由利子

◆今月の華

中村姫路

矢作十志夫

新連載

南 伸坊

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人
句の手触り 俳人の響き

好評
連載

大西 朋

俳句へのまなざし

神作研一

手のひらの江戸
古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

酒井佐忠

本の窓辺
二ノ宮一雄

一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2022年5月号

4月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

特集 俳句における究極の擬人法とは

特別企画 玩具・遊びノスタルジー

巻頭作品10句

石田郷子・唐澤南海子・谷中隆子
坪内稔典・日下野由季・山口昭男
山下美典・渡辺誠一郎

俳壇

5月号

4月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
加藤耕子

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句【第Ⅲ期】：亀井雉子男・笹瀬節子

色の歳時記

俳句文法 そのがポイント

俳句史を見直す

ものがたりのある俳句

先人のことば

小説・遙かなるマルキーズ諸島

俳句と随想12か月

河原地英武・長島衣伊子

連載

大島雄作

井上泰至

秋尾 敏

村上朝彦

中西夕紀

マブソン青眼

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

万象作品の佳句

江見悦子

農小屋の釘ぐいと抜き春迎ふ 宮田千恵子

農作業に使う機具や雑多なものをしまふ小屋が農小屋。冬の間は開けることもなかったその小屋の整理から、農家の一年が始まる。壁か柱に打ちつけてあった古い釘を「ぐいと」抜いた一瞬の動作、その鮮やかさにあつと驚き、力強い一句が成った。春を迎える実感がある。作者は福岡の人。

淡雪や雲つぎつぎと東へ 店網洋子

淡雪は、やわらかではかなく消えてゆく春の雪のこと。牡丹雪、綿雪とも呼ばれる。この句、不安定な春の天気を詠んだ。淡雪を降らせながら、雲は東へ東へと流れて行く。空を見上げその不思議さに心を通わせている。作者は佐野の人。

涅槃図や地に伏して泣く青年僧 内藤允昭

涅槃図は入滅した釈迦を囲んで、生きとし生けるものが悲嘆に暮れるありさまを描いた絵のこと。陰暦2月15日の涅槃会に掲げられる。その絵の中の若い僧に目を留めた作者。突っ伏して泣く僧の、青剃りの頭を想像した。作者は静岡の人。

その下に乳母車寄せ梅ま白 三木豊子

省略の効いた句。「白梅の下に寄せたる乳母車」の情景を、上五で「その下に」と表現した。赤子を乗せた乳母車を、白梅の下に止めた母親。香りに惹かれたのか。「梅ま白」が清らかで、若い母親と赤子に相応しい。作者は横浜の人。

雪解田に下ろす鉄音がはらかし 江口嘉郎

雪解けを待つて、田起しが始まった。まだぬかるんでいる田に下ろす鉄の音がする。山間に響くその音を「やはらかし」と詠んだ。鉄の音が新しい季節の訪れを告げる、日本の原風景でもある。作者は甲府の人。

ボツボツと爪を切る音春隣 臼村喜久代

思い立つて爪を切り始めた。ゆっくりと爪切りを使う無心な時間。「ボツボツ」という、擬音語とも擬態語ともつかぬ措辞が面白い。平明な表現に、日常の暮らしの時間が重なる。もう春が近づいてくる季節だ。作者は金沢の人。

能面のすこしほほむ寒の明 山本一枝

能舞台でシテがつける能面には様々なものがあるが、ここでは若い女面の「小面」を想像した。胡粉を塗られた白い顔に受け口の赤い唇、切れ長の目が、演じるうちに様々な表情に変わる。その表情が微笑んでいるように見えたという。季語「寒の明」が動かない。作者は敦賀の人。

菜の花忌土手の小流れうたふやう 小梁洋子

「菜の花忌」は、国民的作家・司馬遼太郎の忌日で2月12日。遼太郎は菜の花が好きだったという。『坂の上の雲』等、ベストセラーとなった歴史小説の他に、紀行文集「街道をゆく」で好評を博した。国内外をくまなく巡り、その土地の歴史・地理・人物について独自の視点で考察した。掲句の「うたふやう」から、楽しみつつ自在に筆を執った作家の姿が髣髴とする。作者は焼津の人。

立読みの腕にずつしり春大根 渡辺八枝子

食材の買い出しの帰りに本屋に寄った作者、立読みに興が乗って、なかなかその本が手放せない。腕に提げた買物袋の中には春大根が一本。まあずつしりとした重さだ。誰でもが経験しそうな一餉。作者は東京の人。

以下は三句選の作品から

引鴨の岸に窪みを残しけり 渡辺志ま

秋に渡ってきて日本で越冬した鴨たちが、北の国へと帰っていった岸辺に、残されていた窪み。水から上がった鴨が休む定位置だったのだろう。鴨の温みが残っているような窪みだ。思わぬ発見は、写生の目から生まれた。作者は燕の人。

遠筑波青麦ひかる一本道 関口かつ子

筑波山は、関東地方の東部茨城県になだらかな山容を見せる信仰の山。はるかに筑波山を望む一本道が続く。両側は麦畑、麦の鮮やかな若葉が畑一面を覆っている。東山魁夷の「道」と題した絵画を思い浮かべた。命の萌え出る春の景色、青麦が瑞々しい、作者は佐野の人。

畦川のほとり青める菖蒲の芽 仲山さよ子

畦道の傍らを流れる小流れに見つけた、青々とした菖蒲の芽。5月5日の端午の節句には、蓬と一緒に軒に挿したり、風呂に入れて葉の香気を楽しんだりする。邪気を払うと言われ、都会でも、その日が近づくと店先に菖蒲の葉が並ぶ。ゆかしい風習である。作者は佐野の人。

開発の迫る棄て田へ東風荒し 小林あけみ

棄て田は耕す人がなく放棄されている田。今の時代、全国的な課題でもある。「開発の迫る」とあるので、棄て田には看板でも建てられているのか。「東風荒し」に批評の眼を感じ。作者は酒々井の人。

臘月鉄の香残し列車過ぐ 長谷川秀子

ほのかに霞んだ春の臘月の下を、轟音と共に列車が通過する。そのあとに鉄の香が残ったという実感の句。柔と剛の取り合せが面白い構図を作った。作者は静岡の人。

俳句カレンダー掲載句自註

俳人協会発行の今年の「俳句カレンダー」には、万象から6名の方の句が掲載されており、「万象」誌で順次ご紹介しています。今月は掲載句にまつわる思い出などを作者ご自身に綴っていただきました。

実梅干すひとつ筵に子を寝かせ（6月） 佐藤 哲

茨城県の炭鉱に職を得た父は炭鉱の女に恋をした。大学の先輩に相談して北海道へ恋の逃避行をする。赤子を抱いた一行は職を転々とした。戦争中、なんとか高等学校の校長になった。子は男ばかり四人。長男は北大理学部へ。他も同様だったが、次男（筆者）だけは理系になじめず東北大文学部へ進む。母の教育熱はすさまじく、雪の夜道を和服姿の母に連れられて塾通いした記憶が、今も胸に応える。

筆者自身は学生時代に芝居にはまり、留年してやつと卒業。就職は難しく、何とか民放に入りディレクターとなった。が、放送に馴染めず悶々としている時、俳句と出会う。良き先輩に恵まれ大坪景章氏の指導を得て、句集『どさんこのうた』が出来上がった。『どさんこ』とは北海道の人または馬の意。掲句はこの『どさんこのうた』に収めてある。

北海道のほぼ中央。戦争の最中にできた新しい高校の庭に、一本の桜があった。まだ小さいけれど、それなりに初々しい。初々しいのはそこに広げられた筵もそうだったし、それよりも日を浴びて寝かされている赤子がそうだった。そんな様子に見惚れている男がいて、この句が生まれた。（佐藤 哲）



前回につづき、季語以外の俳句ならではの読み方をする漢字を勉強します。とにかく習うより慣れろです。今回は夏の句からあれこれ拾ってみました。それぞれの句の傍線部の漢字を正しく読んでみましょう。

- 1 山の温泉の一号室や明易き 高浜虚子
- 2 おほばこや礎石の窪に昨夜の雨 角川源義
- 3 土用浪小さき浦曲をどよもせる 篠原 梵
- 4 袖無の師に狎れまじと膝正す 森田 峠
- 5 白地着てほつと息づく蹠見ゆ 松村蒼石
- 6 蜜豆の寒天の稜の涼しさよ 山口青邨
- 7 国栖人の面を焦がす夜振かな 後藤夜半
- 8 常闇のさむるともなく夜焚かな 綾部王春
- 9 疫痢児の母よ医師は神ならず 藤後左右
- 10 古りし詩の今日鮮しや巴里祭 高橋邦夫
- 11 竹植ゑて狭庭の容ととのへり 木村未生
- 12 山牛蒡の咲きたる馬欄の霧がくれ 飯田蛇笏

- 【正解】 1 ゆ 2 よべ 3 うらわ 4 なれ
- 5 あうら 6 かど 7 おもて 8 とこやみ
- 9 くすし 10 あたらし 11 さにわ／かたち
- 12 ませ
- （*解答はすべて口語表記になっています。）

北から南から

長崎地域の紹介

長崎

丸本祥夫まるもと しょうふ

今回は、地元で詠んだ句を織り交ぜながら、長崎地域を紹介させていただきます。

古くは八千万年前の恐竜の生息地の地層が発見され「三ツ瀬層」と名付けられました。長崎県南部の野母半島で化石が発見され、今は恐竜博物館に日本唯一のティラノサウルスのレプリカ等が展示されています。

恐竜の棲みし半島野水仙 下見直哉

養殖虎河豚の産地。出荷数は全国一ではほぼ五割を占めます。ほとんどが下関へ。初糶は毎年九月末頃南風泊市場にて袋糶。

虎河豚のええかええかと糶の声 丸本祥夫

歴史上最大規模の一揆といわれる島原の乱。島原市の南部に位置する原城は、六回の攻撃で陥落しました。

いつせいにたはたとべり古戦場 祥夫

日本最古の教会、「大浦天主堂」は国宝です。正式には「日本二十六聖殉教者聖堂」。ローマ法王は二回、来長。当地で核廃絶を表明されました。

教皇の平和訴ふ声牙ゆる 直哉

離島の数も全国一多く、971を数えます。姪の結婚式が行われたのも教会のある伊王島でした。

教会の石段上る島の蟹 祥夫

白南風や島から島へ弥撒の鐘 祥夫

ハウステンボスの敷地面積は東京ディズニーランドの約3

倍。近くには米軍、自衛隊の基地、針尾無線塔があります。

米軍の基地を隔てて牡蠣筏 祥夫

山眠るニイタカヤマの無線塔 祥夫

カステラ購入額年間6643円。贈答用は老舗の福砂屋。

新入生ランドセルより足二本 吉牟田陽子

タクシーの支出額平均が年間14582円は、起伏の多い地形故か。市内電車はどこまで乗っても140円です。枇杷の収穫量は全国一位の1050トン。いたる所で見られます。

枇杷熟るる煉瓦の塀の造船所 三葉造船所にて 祥夫

鰯類の漁獲高も全国一位で、66833トン。

こりこりの刺身がうまか太刀の魚 祥夫

離島が多いためか、医師の数は全国平均よりかなり多い。

カルテ書く林檎を齧りかじりては 陽子

長崎の猫の尾曲がり率79%。永田家の猫の尾は真つ直ぐ。

満月や黒猫の目も真ん丸に 永田美知子

切支丹弾圧で始まったとも言われる十月のおくんちですが、三年ぶりとなる今年は果たして行われるでしょうか？

お神輿の先頭に立つ赤蜻蛉 美知子

東 西 南 北

消 息 等

内海良太名誉主宰、小林愛子名誉顧問の句、「くちら」4月号に。

初霞女峰の胸のあたりまで 良太
吹き晴れて色よみがへる冬桜 愛子

名誉主宰の句、「風港」4月号、「たかな」4月号に。

二の酉の灯の届きたる 飴細工
白鳥へ優しき声を 餌付人

中村千久編集長の句、3月15日の讀賣新聞「四季」で長谷川權氏が鑑賞。

ただいまと転がる靴や春の泥

子どもが外から帰ってきた。玄関に靴を脱ぎ散らかしたまま。その靴についた泥を片づけながら、子どもが外で過ごした時間を想像しているのだろう。春の泥とは春の雨で潤った泥。この句の場合、安心の泥である。句集「薄荷飴」から。

編集長の句、「百鳥」3月号の「現代俳句月評」で川原静秋氏が鑑賞。

風の研ぐ寒三日月を見てをりぬ

「俳句界」1月号、「冬銀河」十句より
他の季節よりも引き締まって見える冬の月、特に寒の頃の月は研ぐええとしている。

ここでは「風の研ぐ」という美しい措辞に目が留まった。空気が澄み渡るため、寒中の三日月は冷たく鋭い。しかも見える面積の小さい割には明るく、さながら研ぎ澄まされた剣のようだ。一年で最も冷えるこの時期、静寂の中に輝くシャープな三日月をじっと見上げている。思慮深い作者の姿が目に浮んでくる。

第19回「富士山を詠む」俳句賞一般の部で下嶽孝一さん、神田美穂子さんが入選。

一般の部の全応募数は2138句、4人の選者による選句。

婚の荷をほどくまなひ五月富士 孝一
蓮開く明けゆく富士に息合せ 美穂子

句 集 紹 介

俳人協会から「自註現代俳句シリーズ第13期「福島せいぎ集」が刊行。

鐘撞いて走り去る子よ原爆忌

昭和二十年八月六日と九日は原爆忌。せめて鐘を撞いて死者を慰めたい。一人の男の子が鐘を撞いて走って行った。原爆の日とも知らずに。(俳句文学館新刊案内より)
俳句大会へ奮って応募を

「ねんりんピックかながわ2022俳句交流大会 俳句募集

・募集期間 4月1日～5月31日

・募集句投句用紙は、「ねんりんピックかながわ」で検索するとダウンロードできます。投句料無料。

・インターネットでも投句可能です。

<https://www.nenrinpick.net/>

「2022村上鬼城顕彰全国俳句大会」

俳句募集

① 第36回全国俳句大会作品募集

・2句1組 千円

・専用投句用紙、コピーも可。

・締切り 6月3日

② 第35回「村上鬼城賞」作品募集

いずれも、応募用紙のダウンロードができます。
<https://kijou.jp/>

【お願い】

「東西南北」は全国の「万象」の皆さんの活動を伝える頁です。紹介・報告等がありましたら、メール、葉書等で発行所までご連絡下さい。

(報・江見悦子)

令和四年

十月号

(七月十五日締切)

(句の表記は歴史的かなづかいで) (＊の枠内には何も書かないでください)

[illegible][illegible][illegible]

*	
---	--

[illegible]

	都または市・町・村名
姓 号	がなり
	年齢

939-0364

射水市南太閤山 13
|
24

成瀬 真紀子 様

84円切手を
貼ってください

□□□□□□□□

(電話番号)

(氏名)

(住所)

編集後記

▽江見主宰が掲げた「温故知新」の合言葉。その「温故（＝故きを温ね）」を具体化するために、主宰による「風のしをり」の連載が始まり、沢木先生の「俳句の基本」を、改めて読む機会を得ることになりました。

三回目の今号は「一点主義」。句会でもたびたびお目にかかる盛り込み過ぎの句、これについての示唆に富む助言が紹介されています。凝視する眼を養い、季語の力、読み手の力を信じて、捨てる勇気を持ちたいものです。（千久）

▽久しぶりに同人会総会が開催され、多くの方々と再会して楽しい時間を過ごすことが出来ました。コロナの感染が心配されましたが、出席された皆様は無事お過ごしでしょうか？ 万象俳句賞の締切が近づいています。事務局では全国の皆様からの多数のご応募をお待ちしています。

（規子）

▽今朝、庭から雀の声が頻りにするので窓から覗くと、物置の上で雀が求愛行動の真っ最中。最近雀の数が減り、わが家の庭で砂浴びをする雀の数が激減。温暖化と瓦屋根の家が減り雀も住みにくい世の中のようなのだ。（美穂子）

▽俳人正岡子規は多くの野球用語を作り、野球殿堂入りをしています。野球少年だった私も、野球観戦を楽しみにしています。春の選抜高校野球大会は3月に何とか決勝戦まで行うことができ、日本のプロ野球も、米国の大リーグ野球も始まりました。今年も大谷翔平の活躍が楽しみです。コロナ禍ですが、日米とも予定通りに試合が行われることを祈っています。（泰山）

▽昨年の8月に表紙裏の担当をお引受けして早や8か月。引継の懇切な説明、新旧編集長をはじめとする編集部の方さんのアドバイス。そして何より快く執筆を引き受けて下さった方々のお蔭で何とかここまで参りました。今後とも宜しくお願い致します。（宏子）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 二二,〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡いたします。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 六月号

第二十一巻 第三号

通巻 第二四三号

令和四年六月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-31-6 603

万象 発行所

☎〇三-六三二四-五七九六

第二十回「万象俳句賞」作品募集

万象俳句賞は毎年一回、広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待いたします。

作品

一人二十句、未発表新作に限る。

四百字詰原稿用紙の体裁（B4判）とし、冒頭欄外に題名を記入のこと。

一通（コピー可）提出。（原稿は担当者が活字化し、コピーしたものを選者に送ります。）末尾欄外に住所、姓号を明記のこと。

他の物を同封しない。封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと。

選者

内海 良太 江見 悦子 小林 愛子 山田 春生 福島せいぎ
松原智津子 亀田やす子 井村 和子 前田貴美子 藤原千代子

応募資格

「万象」同人、会員に限る。

締切

令和四年六月二十日到着分までを有効とする。

宛先

〒一六八—〇〇七二 東京都杉並区高井戸東一—三—一六—六〇三 万象発行所

入賞発表

「万象」十月号。全国俳句大会で、作品一席に万象俳句賞を贈る。